LAGNNALOK~神々の最終戦役録~

鴉～夢の運び屋～

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＬＡＧＮＮＡＬＯＫ～ 神々の最終戦役録～

【Ｎコード】
Ｎ９６６６Ｌ

【作者名】
鴉～夢の運び屋～

【あらすじ】
我々人類が科学発展を迎える以前の事、我々には認識できない「神の地球」が存在していた。そこでは人間、神、妖精等々が一緒に暮らしていた。その世界で、最初にして最後の戦争「ＬＡＧＮＮＡＬＯＫ」が勃発した。そんな中、若くして将軍と言う座に上り詰めてしまった一人の男と、その男を追って同じ将軍になった一人の女がいた。これは、その二人が織りなしてゆく我々の知らない世界での闘いの記録。

感想、評価、読むだけ！何でも構いません。興味のある方はジャンジャン感想くださいね！

第1説　始まり（前書き）

今回から始まる物語。
それは幾百もの神々がそれぞれの思いを抱いて戦う物語
私達にその姿を見せることは無い者たちによって紡がれる
神々の争い。

第1説　始まり

私たち人間が、少なくとも科学を発展する前の事。その頃、人間達は魔法の力を手に入れようと躍起になったり、神から力を奪おうと考えていたり、自分が神に成り替わろうと考えたりしていた人間がいた時代だが、そんな世界とは別の、そう！いうなれば「神々の地球」の様な神聖な大地があった。そこでは、それなりに人間も住んでいた。が、その人間達は我々の世界の存在を知ること無く死んで、生まれていた。

「・・・」ここに黙りこんで座っている青年［ジークフリード・ドラグルス・ラ・ガルドバルド］もこの大地の住人だ。しかし、今この大地は穢れていた。東と西で大きく割れている二つの大国がある。この両国は、今は戦争の真っただ中だ。もともと平和主義を掲げていた東の大国［ユニバース］と、実力至上主義を掲げていた西の大国［ジェネレーション］が反発するようになったのがこの戦争［ＬＡＧＮＮＡＬＯＫ］の事の発端である。そして、ユニバースの若き将軍であるジークフリードもまた、戦争の巻き添えを食っていた。そして現在。

「将軍！このままではこの町は壊滅です！どうかご指示を！」
若い天使（我々の世界で言う所の兵士）が、苛立ちを隠そうともせずに長テーブルを殴りつけた。無理もない。もしもこのまま何も手を打たなかった場合、この町［レインバレー］は敵国の手に落ちてしまう。しかし、ジークフリードは何も喋らなかった。その手に持った自分の身長程もある大きな両刃剣［ゼロブレイカー（始まりと終わりを切り捨てる聖者）］を抱えたまま何も話さなかった。しかし、ジークフリードは怖かったのでは無い。確信を持っていたのだ。絶対に勝つという。その思惑は見事に成功した。何かを感じ取った

ジークフリードは立ちあがって作戦テントを飛び出した。そこには、何人かの茶色い鎧をまとった天使がいた。鎧の色で分かることなのだが、この天使たちは敵国の天使だ。他にも羽の色が黒か白かで見分けるという方法もあるが、とにかくこの兵士は敵だった。

「・ひぃ・・」

味方の兵士が怖気づいて逃げようと少しずつ後ずさっていた。しかし、そんな恐怖も次の瞬間には全て消え失せていた。

「ぐわあぁぁ！」

奥の方から敵の物と思われる断末魔が聞こえてきた。その次の瞬間には次々と敵の兵士が倒されていた。

「・・ハァ・・やっぱり君か・・。」

ジークフリードが、ため息をつきながら頭を押さえた。その相手とは、目の前で敵を全て蹴散らした女性だった。その女性の名前は［ウラヌス・デ・フリジーデリヒ・クリスト］。ジークフリードと同じ、若くして将軍になった女性である。その少女が振り回している細身の長剣は［イクスカリバ（勝利と栄光を約束した聖剣）］といって、謎の多い剣なのだがウラヌスはきっちりと使いこなしていた。

「ジークぅ！終わったよぉ！」

全ての天使を切り捨てたウラヌスは、ジークの方を向いていきなり飛びついた。普通に考えると戦闘中に不謹慎だと思うが、彼女の場合は違った。彼女には軍隊と言うものがどういうものなのかは理解されていなかった。彼女からすれば、戦闘もジークの露払いの為と思っているのかもしれない。しかし、どちらにしてもウラヌスの知識は狭かった。

「ウフフ・・やっとジークに会えた！」

ニコニコと笑っているウラヌスを見て、気が抜けたのかジークの表情が緩んでいた。そして、二人を明るい日差しが照らしていた。

第1説　始まり（後書き）

全ての敵をあっという間に撃破したウラヌスは、ジークを連れて無理矢理に王都である「グリーンホープ」へと帰還した。そこで二人は、色々な人と出会いながら王都へ向かって歩いて行く。

次回

ＬＡＧＮＮＡＲＯＫ　第２説　友人

最初からこんな仕上がりになっています。面白い！続きに期待！と言う方はお気に入り登録を、話がしたい！私のも読んで！な人は感想で声を掛けてもらえると嬉しいです。

第2説　友人（前書き）

昼過ぎの草原を走り抜ける一台の馬車の姿があった。
今回の話は、その中でお喋りをしている二人が繰り広げることとなる。
第2説　友人　開幕！

第2説　友人

何処までも付いて行きそうなニコニコとした笑顔。それは、ジークにとっては弱点になりうる存在だった。ウラヌスがもしも敵側に回ったとしたら、自分は対処することが出来るだろうか。そんな物騒なことを考えていると、不思議に思ったウラヌスがその純粋無垢な表情を向けてきた。

「ジークぅ・・どうしたの？気分でも悪い？」
そう言ってウラヌスがジークに近づいた。これは補足説明になるが、馬車の中は普通の天使用の積車では無く、将軍格の馬車にはとても一般人が手を出せないような高価な代物が設置された豪華なワンルームの様な感じだった。

「・・ん？いや・・特に何処も無いが？（なんでこんなに顔が近い！）」
平静を装っていたジーグだったが、動揺もしていた。あと数？でキスしてしまいそうな程近かったのだ。ウラヌスからしてみれば、これも自分から望んだ行為なのかも知れない。しかし、少なくともジークは動揺していた。

「ふ～ん・・わかっ・キャッ！」
ウラヌスがジークの安全を知り、安心して元いた位置・・即ちジークの隣に座ろうとした時、馬車が勢いよく揺れた。どうやら大きな石か何かを踏みつけたらしい。とにかくその振動で足元をすくわれたウラヌスは、ジークのいる方向へすっ飛んだ。

「・・っと！お前こそ大丈夫か？」
少し浮いたウラヌスを、すかさずジークが受け止めた。しかし、受

け止め方が悪かった。お姫様だっこの状態で受け止めたせいか、ウラヌスの顔は真っ赤になっていた。しかし、ジークはそれをただの発熱と勘違いしていた。鈍感なのだ。こやつは。そうこうしているうちに馬車の中からでも分かる程にいい香りが漂ってきた。帰って来たのだ。王都に。

「ありがとねぇ！」

降り場に到着した馬車は、その場所で待機していた。暫くして、ウラヌスとジークが降りてきた。すると、降りてくるのを待っていたかのように記者達が詰め寄ってきた。しかも何故かインタビューはジークにだけ向けられており、ウラヌスは此処まで馬車を引っぱってくれた馬（ユニコーン）を撫でていた。

「あぁもう！止めてくれ！何も答えることは無い！」

それだけ言うと、足早に歩を進めてウラヌスの手を掴み、同じペースで王宮へと急いだ。暫く早歩きをしていると、あっという間に着いてしまった。この場所の名は「聖クラインフォード王宮学院」王宮と学校が一つになったとてつもなく広い学院だ。

「・・おっ？ジーク！待ってたぜ？遅いじゃないか。」

この男の名前は「ヴァイス・リッツェル」この世界に住む人間とエルフの間に生まれた言わばハーフエルフだ。ヴァイスは１５才で史上最年少となる博士号を取って以来この学院に教授として生徒に授業を教えている。しかし、女癖が昔から悪い。一時期は生徒をナンパしたとして裁判にかけられたくらいだ。

「いいのか？教授が正門で人を待ってたりして・・」

続きを言おうとしたジークだったが、急に体が重くなった。見ればウラヌスがジークに飛びついてきていた。先程手を放していたので自由に動けていたのだ。しかしウラヌスには困ったものだ。まるで

子供が大人に飛びつくように抱きついてくるのだから。

「ジークぅ！・・あぁ！ヴァイスん！久しぶり！」

まるで猫が甘えてくるようにジークに抱きついていたウラヌスだったが、ヴァイスの姿を見つけると変なあだ名でヴァイスを呼んだ。ヴァイスの方はいい加減馴れているらしく、嫌がるそぶりも見せてはいなかった。むしろ名前を呼ばれて（あだ名だけど）嬉しそうにしていた。

「おぉっ！ウラヌスちゃんも一緒かぁ！こりゃお似合いの・・「誰がお似合いだ！！」おおっとすまねえっ！わりぃわりぃ。今はそれどころじゃないんだ。いいから来てくれ。」

笑いを絶やさずに話していたヴァイスが、不意に笑顔を閉じて真剣な表情になった。それに気押されるように大人しくなったウラヌスとジークは、黙ってヴァイスの後をついて行った。正門から入り、長々と続く校庭を横切り、教室棟に入って階段を幾つも昇って行った。そして、最上階のひときわ大きな扉の前でヴァイスが立ち止まった。

「・・二人とも・・この先にあるのは全て現実だ。眼を背けないでほしい・・」

とても深刻そうな表情と声色を使って囁くように喋ったヴァイスだが、ジーク達には何も想像できなかった。それを見たヴァイスがため息をつきながら扉を開けた。そこは大きな空間が広がっており、その奥には一人の少女が堂々たる威圧を持って座っていた。その少女を、ジークをはじめとする全員が知っていた。その少女は、少し前まではジーク達と仲良く過ごしていた少女だった。しかし、今は全然違う威圧を見に纏うように感じられた。

「・・アリスちゃん？」

ウラヌスが不思議なものを見るような眼でアリスと呼んだ少女を見つめていた。しかし、いつもなら甘えるようにして飛びついてくるはずのアリスの姿は何処にも無かった。目の前にいるのは、感情を隠しているように見える一人の少女ただ一人だった。

「二人とも聞いてくれ・・今は・・アリスちゃんが国王なんだ・・」その報告を、少し涙目になりながら告げたヴァイスの心は悔しさで満ち溢れているようにジークには感じられた。そして、その報告の意味を確かめて少し驚くそぶりを見せた。しかし、実際には驚愕しているのも事実だった。

「私からお話しします。ヴァイス様は離れていてください。」椅子に座りっぱなしだったアリスが、立ちあがってジーク達のいる場所まで歩いてきた。ゆっくりとした足取りだったがその表情は薄かった。もう少し久しぶりに会ったなりの反応を示してほしいものだ。

「私、アリス・クラインフォード・リリ・カイザは、先日亡くなられたわが父、リッド・クラインフォード・エル・カイザの遺言によって、昨日に王位を継承いたしました。よって、現在の王位・・神の頂点とでも申しましょうか・・それは私の今ある姿です。」とても慎重に言葉を選ぶようにして説明したアリスは、今までのアリスとは確実に別物だった。以前は王位など微塵も気にせずにジーク達と遊んでいた少女が、今は表情を殺して市民の前に立つ王様となっていた。この差は凄いことだとジークは改めて思い返した。

「本日は戦場からの帰還でお疲れでしょう。今日は自宅にお戻りになってじっくりとお休みなさって下い。私は何時でも此処でお待ちしております。」
そう言われて、丁寧に頭を下げたジーク達はあっさりと帰って行っ

た。これではまるで赤の他人だ。すると、階段を下りていたその時、ヴァイスが口を開いた。

「二人とも、アリスちゃんの無表情さに驚いたろ。あれについては俺が説明しよう。」

そう言って二人が口をはさんでくるのを止めてヴァイスが説明を始めた。これは余談だが、ヴァイスは博士号の他にいくつもの免許を持っている。例えば現在の教授職の免許である教員免許。次に、軍に志願するのに必要となってくる戦闘免許。他にも色々あるが、最後に医療分野で活躍するための医師免許も所持している。

「医師として断言するぜ。あの子は・・もう一生表情を変えることは無い！あの子に心理テストを受けてもらったんだが、不可解なことに心理がごちゃまぜだったんだ。そして、知り合いの医師に頼んで脳内を覗いてもらった。そうしたら、彼女の表情をつかさどる細胞が死滅していることが分かったんだ。これが何を意味しているのか分かるか？彼女は金輪際笑うことも泣く事も出来ない体になっちまったんだ。しかも意地の悪いことに、この細胞が死滅したことが原因でテロメアの連鎖消滅も一緒に確認されたんだ。これによって、彼女の寿命は著しく減っちまったんだ。」

悔しながらに説明をしたヴァイスは、目に涙を浮かばせていた。その悔しさは、アリスを助けられなかった悔しさと、自分のしていることの虚無感からの物だった。そして、重い空気の中、三人は階段をゆっくりと降りて行った。

第2説　友人（後書き）

悔しさに暮れていたジーク達が階段を下りていると
一人の少女と久しぶりの再会を果たす。
その少女は明るい眼差しの中に何を映すのか

次回　第3説　妖精

第3説　妖精（前書き）

悔しさを心に宿しながら階段を下りていた3人の前に
一人の少女が現れる。
少女は、その純粋な心で皆を癒す力となる

ＬＡＧＮＮＡＬＯＫ　始動

第3説　妖精

失意の念を胸に秘め、どんよりとした空気の中で3人は階段を下りていた。

「はぁ・・・。」

不意にため息をついたジークだが、突っ込んでくれる相手は存在しなかった。しかし、階段を降り切るとそこには一人の少女が立っていた。その少女を、ジーク達は知っていた。

「・・・ルイズか？」

そこにいた少女「ルイズ・ウォルター」は妖精である。属性は七曜の水だ。水はこの世界では癒しと感情の象徴とされている。そんな彼女なのだが、見た目からすれば少女である。しかし、妖精なのでそれなりに年齢を重ねている。しかし、妖精に年は関係ないのだ。

「・・・！ジークだ！ジークだ！ワーーー！ジークーー！」

まるで幼い少女のようにジークに飛びついたルイズだが、ウラヌスがルイズを引っぺがそうと躍起になっていた。その内、それも止めてジークに抱きついていた。これではジークが身動きが取れない。しかも運の悪いことに、ウラヌスの胸がジークの腕をがっちりと包んでいた。戦場で同じことをされても、鎧を着ているので平気なのだが、今は薄手のシャツ一枚のみとなっている。馬車を降りる前に熱いという理由で脱いでいたのだ。その所為でジークの顔は真っ赤になってきた。

「おいおい！羨ましい限りだぞ！ハハハ！」

嫉妬の念も込めているであろうヴァイスが、腹を抱えながら大笑いしていた。どうやら先程の空気は一掃していたらしい。流石水の妖

精。空気を良い意味でぶち壊していた。

「ところで、後ろのそいつらは？」

何とか話題を逸らそうと、ジークがルイズを見守っているように見える少女達を見た。すると、ジークの腕に抱きついていたルイズは、ジークの腕にキスをして離れた。それに少々戸惑ったジークだったが、それ以上にウラヌスが何やらキーキーわめいていた。

「紹介するよ。私のお友達さ！まずはエカテちゃん。」

「宜しくお願いいたしますわ。私、エカテリーゼ・ブレテル・イリアと申します。」

丁寧に自己紹介をした少女は、どことなく笑っているような気がした。なんだか陰で高笑いとかしてそうなタイプだとジークは印象付けた。年はルイズより上そうだ。

「次にプレシアちゃん・・・何してるの？」

ルイズの奥で、プレシアと呼ばれた少女がルイズの服を掴んで震えていた。暫くその状態が続いたが、やっと観念したのかプレシアがルイズの後ろから這いだして来た。

「・・・あ・・あの・・私・・・プレシア・・・プレシア・エリーズ・レシテアです！・・言えた。」

やっと口を開いた彼女だったが、人見知りなのか直ぐにルイズの影に隠れてしまった。年はルイズよりも下に見える。と言うより見た目がまんま小学生の低学年だ。

「・・っとまあ、一通り挨拶も済んだし、まぁた私はこ・・ウギギ・・」

ニヤニヤしながら、ジークに近づいていたルイズはチャンスと思っ

てジークに飛び込もうとした。しかし、それを読んでいたジークは頭を見事にキャッチしてそれを阻止した。悔しかったのか、顔を押さえられているのにも関わらずルイズは腕を、届かないのにジタバタさせていた。グルグル回っているのを見ていると、とても面白い。

「・・・とりあえず、帰らせてくれないか？」
見ると、ウラヌスが抱きついたままになっていた上に、ルイズも解放した途端にまた抱きついて来て、それに釣られるようにして妖精の皆も抱きついていた。此処まで来ると、ヴァイスからはジークの姿が見つけづらかった。それよりも助けてくれよと内心思ったジークだったが、息が出来なくて喋れなかった。

「おいおい！皆！ジークの顔色が悪くなってるぜ？・・・しゃ～ねぇ・・おりゃ！」
ジークの表情が芳しく無くなってきたのを警告しようとしたヴァイスだったが、全員が耳を傾けなかったので、ヴァイスは皆につぼを押した。すると、途端に全員がへにゃへにゃと崩れ落ちた。

「今のつぼは、性欲が痛覚にフィードバックされるつぼだ。皆エロい事考えてたんだな・・・」
その説明を受けた全員が体をうつぶせにしたままビクッと震えた。どうやら図星らしい。しかしヴァイスにはたまげた。こんなつぼまで知っているとは。流石、女たらしは格が違った。

「助かったぜ。ヴァイス。」
礼を言ったジークは、ウラヌスを背負った。その時、ウラヌスから喘ぎ声らしきものが聞こえた気がしたが、ジークは無視した。そして、ジークはウラヌスを連れたまま自宅への帰路をたどって行った。

「どうしようかねぇ・・これ・・」

あとに残されたヴァイスは困り果てていた。ヴァイスの周りには、合計三人の妖精が転がっており、そのどれもが体が動けないでいた。

「しゃ～ねぇ・・・連れて帰るか。」

三人を軽々と持ち上げたヴァイスは、そのまま学院の中へ入って行った。

第3説　妖精（後書き）

数週間ぶりに自宅［と言っても大きな屋敷］に帰還したジークは背負っていたウラヌスをベットに降ろす。
しかし、ジークはこの光景を見て嫌な記憶を思い出す。
次回　第４説　記憶　乞うご期待！

第４説　記憶（前書き）

人ごみの中を、眠ったウラヌスを背負ったまま歩いていたジーク
彼の目指す場所は自分の住んでいる屋敷だった。

第４説　記憶

ジークが道沿いに歩いていると、広い大通りに出た。その奥に、ひときわ大きな屋敷があった。

「数週間振りか・・・皆元気にしてるかな・・」

ジークはここ数週間の間は国境の防衛線に参加しており、その間は屋敷は開けっぱなしになっていた。同時に衛生管理も滞り気味な結果、ジークの髪は少し伸びていた。とにかく、ジークは館の使用人たちに会うのが久しぶりだったのだ。

「よし・・・カギは・・・これだな・・よっと・・」

ウラヌスを背負ったまま器用に館のカギを取りだしたジークは、それをそのまま門の鍵穴に差し込み回した。すると、鍵が開けられると扉がひとりでに開いて行った。

「流石はエルフ族だ。見事な仕事っぷりだな。・・家にも技術部置こうかな・・」

そう呟きながらジークが門の中に入った。すると、これまたひとりでに門の扉が閉じられた。エルフ族の技術力は本当に凄いものだ。

「皆！今帰った・・・・挨拶もなしか・・」

ジークが館に入ったが、そこには誰も立ってはいなかった。いたとしても、せいぜいお飾りの石像や武器の類の物ばかりだった。

「・・ウ・・うぅん・・あれ？ジーク？」

館の扉をジークが閉めると、同じようなタイミングでウラヌスが目を覚ました。ウラヌスは意識がはっきりとしていれば、さぞ喜んでいただろう。なにせ好きな人物をいつの間にか抱きしめていたのだ

から。そう思ったウラヌスは、いつものようにまたジークを強く抱きしめた。しかし、背負われてる。［俗に言うおんぶ］状態だと、腕は何処を囲んでいる？そう、首だ。ウラヌスが思いっきり抱きしめた為にジークの呼吸機能は著しく低下、もとい窒息しかけていた。

「・うふふ・・ふふ・・あれ？・・・ジーク？・・・・・きゃぁぁ！」

やっと異変に気がついたウラヌスだったが、時は既に遅かった。ジークは顔色を悪くして、何とか立っていられる状況下にいた。しかもウラヌスは異変に気づいても力を緩めなかった。限界に達しそうになったジークは、勢いよくウラヌスを上方に放り投げた。勢いが良かったためウラヌスは高く舞い上がった。その間に思いっきり深呼吸をしたジークは、素早くウラヌスをお姫様だっこで受け止めた。

「・・ふふふんふうふん・・・うにゃ！！」

その時、奥の廊下から一人のメイドが姿を現した。ジークが見たことのない人物とすれば最近になって入ってきたのだろう。ということはそのメイドもジークの姿を知らないわけだ。そうなってくると、ジークにもメイドの気持ちが楽々と分かった。「知らない男女がこんな所でイチャイチャしてる・・・変態だ！報告しなきゃ」という読みが当たったかのようにメイドはもと来た廊下を掛けて行った。

「ちょっと待て・・もう居ない・・」

ジークがメイドを止めようとしたのだが、既にメイドの姿はどこにもなかった。しかも、ずっとウラヌスを抱えたままなので腕が疲れてきていた。さらに運の悪いことに、安心しきったのかウラヌスは眠りについていた。いつもこの調子でされていてはその内戦闘中にも眠りそうだ。ジークは背中にそんな嫌な予想を仕舞い込んで自分の部屋に向かった。

「ここだ。・・・それにしても、誰とも出会わないな。・・・全員そろってストライキ・・ありうる。」
そんなことを考えながら、以前まで自分がぐっすりと眠っていた自室に足を踏み入れた。すると、少しくらい汚れていてもおかしくない筈なのに、部屋はまるでついさっき掃除をしたかのように綺麗だった。それこそ光が飛び散っている程に。

「とりあえずは此処に横にさせて・・・・横にさせて・・」
とりあえずは自分が以前まで使っていたダブルはあるくらいのベットにウラヌスを横にさせた。すると、ウラヌスの着ていた薄手のシャツがはだけて、胸の半分が見えてしまった。慌てて元にもどしたジークだったが、胸のドキドキが収まりそうに無かった。暫くはこの状態が続いたが、ウラヌスの気持ちよさそうに寝ている顔を見たジークは嫌なことを思い出してしまった。

それはジークがまだ幼かった頃、ジークの屋敷［テスタロス邸］には、使用人は勿論、ジークの他に父と母がいた。

「父上！見てください！今回も僕が最優しゅ・・・父上？」
ジークが見つめる先には、いつもそこに座っているはずの父の姿はどこにも無く、代わりに置手紙が置いてあった。それを取ったジークは、読めない字を省いて声にだして読み始めた。

「テスタロス・ウル・ドラク・ラムダ・ガルドバルド・・、そなたにえん・・任務がしもされた・・今をもって・君に出兵命令が出た。家族と・れて、・・・であるシュッツリバーへ・くことを命ずる？どういうこと？ねぇ！メイドさん？これはなんと書いてあるのですか？」ジークは、部屋を通りかかったメイドに声を掛けて紙をメイドに渡した。それを読んだメイドは、涙を流しながら口を押さえて

無言のまま紙を持って出て行ってしまった。
紙にはこう書いてあった。「テスタロス・ウル・ドラク・ラムダ・ガルドバルド将軍、そなたに遠征任務が下された。只今をもって貴君に出兵命令が出た。家族と別れて、激戦区であるシュッツリバーへ赴く事を命ずる。」と。

「父上、出かけちゃったのかな・・・帰ってくるの、何時だろう・・・」
悲しい顔をしても父親が帰って来ないと知りながら、ジークは少し涙ぐんでいた。その表情は実に子供らしかったが、それは褒め言葉にはならなかった。

「ねぇねぇ！メイドさん達！父上は・・」
ジークが、メイド達がいるであろうリビングルームの扉を開けると、そこは真っ赤な水たまりになっていた。その隣では先程の紙を持って行ったメイドが立っていた。質問をしようとしたジークだったが、メイドは何もしゃべらず立ったままだった。改めてリビングの中を確認しようとしたジークだったが、メイドが「見てはなりません！」と言ってジークの目を自分の手で覆い隠した。

「・・何処へ連れて行くのですか？」
惨状の現場に長時間いては駄目だと思ったメイドは、ジークに自分のスカートを破いて作った目隠しを巻いて、抱えたまま走り出していた。ジークの質問に、メイドは「安全な所です！」とだけ答えた。

「此処を曲がれば・・っうぁ！」
ジークには、後ろから聞こえた何かを斬るような音と、メイドのうめき声しか聞こえなかった。すると、メイドの手に力が無くなってジークは放り出された。空中で目隠しを取って見事に着地したジークは泣き叫びそうになった。ジークの足元では、先程まで自分を

運んでいたメイドが、背中から血を流しながら倒れていたのだ。

「メイドさん?！メイドさん！」

ジークがメイドを揺すって呼んでいたが、メイドの目には既に光が失われていた。直ぐに血の流れも停まり、メイドが息絶えたとジークに認識出来た。これがジークの初めて見る死体となってしまった。しかし、ジークに泣く暇など無かった。ジークの前方、誰かがメイドを切ったとしたら立っている方向に何やら獣の様な唸り声が聞こえた。

「グルルゥ・・」

ジークが振り向くと、そこには目が６つもある巨大な猫の様な奇妙な生物が立っていた。

「・君か・・メイドさんをやったのは・・・君かあぁぁぁぁ！！」

怒りに満ちたジークは、怪物に突撃していった。しかし、武器も持っていなかったジークはあっさりと怪物に叩き倒された。その時、ジークは感じた。この怪物が遊んでこんなことをしたと。

「まだだぁぁぁぁ！」

着地したジークは、すかさず怪物にもう一度突撃を掛けようとしたが、ふと怪物が消えてしまった。一瞬死角に入られたと思ったジークだったが、消え方を考えてみた。一瞬で姿が消えたような消え方。それはつい先日学院で習った「召喚獣の戻し方」と酷似していた。それを思い出した瞬間にジークはあれが「誰かが放った召喚獣」と分かった。ようは好き放題された後に逃げられたのだ。

「メイドさん・・」

ジークは、失意と悔しさの念を心に縛りつけてメイドさんを見た。もうとっくに動かなくなっていたのだが、ジークはメイドさんがよ

みがえると信じて一晩中メイドの顔を抱えていた。

「ウラヌス・・・」
そして今に戻る。因みに、これはジークが聞いただけなのだが、この館の前身「テスタロス邸」で生き残ったのはジーク一人だったらしい。その後の報告兵の報告で、シュッツリバーが落ちたとの報告を手紙で聞いたジークは、父が死んでいたと確認した。

「なんで・・・あんな・・」
その時のメイドの顔が、今目の前でぐっすりと眠っているウラヌスとそっくりだったのだ。いや、そっくりどころか瓜二つだ。その為、ジークはウラヌスの顔を見るたびにメイドの顔を思い出してつらそうな顔をするのだった。さらに、それが原因でウラヌスが好きになれないでいた。

「とにかく、ここから出よう。」
心が静まりきらないジークは、気持ちを落ちつけようとドアのノブに手を掛けた。

第４説　記憶（後書き）

館に帰ってきて速攻で嫌な気持ちをさらけ出したジーク
そんなジークを知らずに、館のメイド達は何やら怪しげな行動を取っていた。
この後のジークの運命やいかに！

次回　ＬＡＧＮＮＡＬＯＫ第５説　祝いの館

第5説　祝いの館（前書き）

いつの間にか眠っていたウラヌスを
以前は自分の寝ていたベットに寝かせたジークは
嫌な思い出を仕舞い込もうと外に出ようとしていた。
今回は、その続きのお話。

第5説　祝いの館

嫌な記憶を思い出してしまったジークは、気分を変えるために屋敷を適当に歩き回るという自分に宛てた言い訳を心に仕舞い込んで寝室の扉に手を掛けて、開いた。

「ふんふんん・・ひゃっ！」

ジークは、扉の前から聞こえていた鼻歌に気がつかずに、扉を開けてしまった。その結果、そこを通りかかったメイドが扉に激突した。どうやらお互いに反応が鈍かったらしい。

「・・！悪い！大丈夫か？」

すかさず（といっても2秒は気づかなかった。）メイドに気づいて、ジークは手を差し伸べた。すると、メイドはその手を握って立ちあがった。見た目からしてまだまだ幼い少女だ。年齢でいえばまだ10歳程度だ。すると、顔を上げた少女はジークの顔を見るや否や沸騰でもしたかのように顔が真っ赤になった。

「・・・（こ・・この人が、私の・・・ご主人様・・）・・・」

様子がおかしいと思ったジークは、メイドの容体を計ろうと彼女の額に手を当てようとした。が、彼女は何をそんなに驚くのか分からない程に動揺して、ジークの手をひっぱたいて何処かへ走り去ってしまった。何がどうなっているのか分からなかったジークは、行きたくは無かったがきっと使用人たちがいるであろうリビングルームへと足を向けた。

「そう言えば、さっきの女の子・・・エルフだったな・・」

ジークは、先程ぶつかって（扉と）しまった少女の事を思い返してみた。エルフは、基本的には人間と殆ど同じ容姿をしている。しか

し、神（人間と全く容姿が一緒。ジークやウラヌス、アリス等が此処に入る。）とは違ってエルフは、耳の先がやや尖っている。これはエルフ族全てに共通しており、この特徴で種族を決める輩もいるが、エルフ族は耳で判断されるのを基本的に嫌っている。それは何故か。エルフは、普通の人間よりも体力が劣るものの、頭脳の方は人間の倍近く優秀だった。その為、昔に何度か愚かな民どもがエルフの頭脳に嫉妬して所謂「エルフ狩り」を行っていたのだ。それはこの国の初代国王が平和主義を掲げた時に廃止された。それによって今の人とエルフの共存が成り立っているのだ。

「さてと・・初等科だった頃の授業を思い出してたらいつの間にか着いたな。」

ジークからしてみれば、屋敷の中をウロウロしていただけなのに、いつの間にか吸い寄せられるようにこの、惨劇のあったリビングルームへ到達していた。扉のノブに手を掛けようとしたジークだったが、途中で手が止まってしまった。自分では開けるつもりだったのだが、体は昔の記憶が怖くて手が伸ばせないでいた。このドアを開ければ、またあの惨劇が蘇るような気さえしていた。しかし、勇気を振り絞ったジークは、ドアノブを掴むと勢いよく扉を開いた。

『・・お帰りなさいませ！ご主人様！！』

ジークが扉を開けると、そこにはテーブルが幾つも並んでおり、その上には豪華な御馳走が所狭しと並んでいた。そして、入り口では使用人一同（総勢１０人）が出迎えてくれた。

「・・あぁ、ただいま！」

ハイテンションに返事を返した使用人たちはそろって喜んだ。なにせ主人が怪我も無く無事に帰還したのだから。しかし、ジークには気がかりな点があった。前に出兵するときは８人だった使用人が、増えていたのだ。しかも、先程の少女の姿が無かった。

「おい！これはどういうことだ？説明してくれないか？」
ジークは、使用人の中からメイド長であるイヴ・リートウェルと言う女性を見つけて声を掛けた。因みに、彼女はジークが屋敷の権利を得た時（１５才の時）から住み込みで働くようになったメイドであり、ジークとは執事長であるアダム・アレイスタと並んで長く一緒に住んでいる。なので、今では兄弟のように接している。しかし、さすがに他人がいるときにはそれは避けていた。

「なに？おにいちゃ・・ととっ！・・ご主人様？」
素の感情が飛び出しそうになったイヴだったが、慌てて声を塞いで業務の時の言葉に変わった。このあたりは流石はイヴだと思えた。彼女は、ジークが通っていた学院に通ってもいるのだが、そこで彼女は演劇部の部長をしているのだ。ヴァイス曰く、「あんな可愛い子がいるんだったら、俺はお前の家に居候してでも彼女を射止めて見せるぜ。」らしい。このときは突っ込みを入れただけで終わったのだが、ヴァイスが未だに狙っているという噂をたまに耳にすることがある。

「ハァ・・新しいバイトを何人雇った？」
ため息交じりに聞いたジークだったが、すぐさま帰ってきたイヴの答え「何言って・・ととっ！何を仰いますやら。全員住み込み志望の本職者ですよ？半数は捨てられていた子供を、昔の貴方のように優しい心で迎え入れました。」だった。その裏側に、脅迫の念が込められているとジークは感じた。

「・！・何を勝手な・・」
注意しようとしたジークだったが、その視線に使用人たちが入った。よく見ればまだ幼い。それこそ年が低ければ１０歳くらいの子供もいた。これでは児童保育だ。いや、教育かもしれない。

「！・・・くっ！勝手にしろ！」
まさかこんな子供たちを外に放り出すわけにもいかず、ジークはしぶしぶ了承した。すると、まるでお菓子をもらえた子供のように、使用人たちが喜んだ。

「はぁ・・なんでこんな・・」
俯き加減になっていたジークだったが、いきなり後ろの扉が開いて二人の少女が入ってきた。その二人を、ジークは見たことがあった。

「すいません・・おくれちゃいまし・・あぁぁっ！さっきの変態さん！」

「・・すいません・・あっ・・暴力主人・・」
二人してジークを罵倒しているのだが、ジークは否定しきれなかった。これで信用はガタ落ちだと思い覚悟を決めたジークだったが、素早く誰かの手が二人にハリセンによる鉄槌を下した。それは、メイド長をしているイヴだった。

「失礼でしょう！二人とも！今すぐ謝りなさい！それと自己紹介！」
すごい剣幕で怒鳴りつけたイヴは、その後直ぐに自分のしたことが恥ずかしくなってハリセンを背中に隠していた。

「ごめんなさい・・私はイグニス・フィア・ウォンテリット・・妖精っす・・」

「すいません、すいません・・・私、チェリス・ギュント・・・エルフ・・です・・」
イグニスは普通に頭を下げて謝っていたが、チェリスは顔を赤面させて動けずにいた。なにやら不思議に感じたジークだったが、今は

早い所このパーティーを楽しみたいと思い始めていた。

「うん・・宜しく。・・さぁ！みんな！今日は俺の帰還祝いの準備をしてくれてありがとう。今日は、従者と主人では無く、みんな同じ友達同士と思って楽しんでくれ！以上だ！」

それだけ言ったジークは、早速飲み物（オレンジジュース）を呑み始めた。

そして時間は動き始めた。

第5説　祝いの館（後書き）

パーティーが盛り上がってきた所で
ウラヌスが目を覚ましてリビングルームへやってくる。
しかし、寝ぼけているのが原因なのか、ジークを見つけると
まるで久しぶりの再会をしたかのように抱きついて離れなくなって
しまった。

次回　ＬＡＧＮＮＡＬＯＫ　第６説　宴

第6説　宴（前書き）

ジークが皆と打ち解けて
今となっては宴会状態になっていたリビングルーム
そこに近づく足音が一つあった。

第6説　宴

使用人たちがたくさん作っていた料理を食べていたジークだったが、次々と使用人（殆どがメイド）が自分で作ったであろう料理を持ってきて、テーブルの上に並べて行った。その所為で、ジークの座っているテーブルの上は料理で埋め尽くされていた。

「・・・無理無理！こんなの（子供の純粋な瞳）・・・よし！お兄ちゃんはがんばるからな。」

ジークが、無理矢理に自分の口に食事を運んだ。本当ならばもう腹がいっぱいで何も食べられないのにだ。しかし、ジークは子供には弱かった。何故なら。昔の自分が思い出されて動きが緩慢になってしまうのだ。

「やったぁ！お兄ちゃんに食べてもらえたぁ！」

ジークが食事を口に運ぶと、メイドが飛び跳ねて喜んだ。どうやらこの子が作ったらしい。ジークからすればまだまだ料理として店に出すことは出来なかったが、十分に美味しいと思っていた。すると、とつぜん扉が開いた。その中からは、まるで子供のように髪の毛が乱れた状態のウラヌスだった。

「ふあぁ・・ジークぅ・・美味しそうね・・」

ウラヌスはよだれを垂らしながら、料理では無くジークを見ていた。その瞬間に、ジークの背筋に悪寒がマラソンをしていた。かなりヤバいと思ったジークだったが、全方向をメイド達に囲まれていた。逃げ場を失ったジークは、助けを求めようと執事長であるアダムを探した。しかし、当のアダムの姿は何処にも見当たらなかった。それどころかイヴの姿も見えないでいた。どうやら二人で出掛けているらしい。何故二人がばらばらの行動に至るか想像がつかないかと

言うと、二人はまるで兄弟のようにいつも一緒に行動しているのだ。

「ぐぬぬ・・助けは無し・・逃げ場もなし・・戦場なら確実に・・ぐはっ！」

色々と試行錯誤していたジークだったが、遂にウラヌスが目の前にやってきた。そして、ジークが座っている状況にも関わらずジーク目掛けてダイブした。そのダイブは、見事にジークの腹部を直撃した。ウラヌスの事だから、ただ抱きつきたかっただけなのだろうが、とにかくジークの腹部にアタックが通ったことにより、食事の詰め込みすぎで膨らんでいた胃が揺れまくった。

『私のお兄ちゃんから離れて！！』

ウラヌスがジークに抱きついていると、メイド達が一斉にウラヌスを退かしにかかった。その中には、先程までジークを変態呼ばわりしていた筈のイグニスや、泣きわめきそうな顔をしていた筈のチェリスの姿があった。どうやらすっかり気に入られたらしい。

「やだよ～～っ！放さな～～い・・・・ふふふ！！」

ジークに抱きついていたウラヌスが、満面の笑みを浮かべながら笑っていた。しかし、ジークには苦渋の他の何でも無かった。ウラヌスが離すまいとして強く抱きついていた為に、ジークは吐きそうになっていた。しかし、こんな所で醜態をさらすわけにはいかないと情熱を燃やしたジークは、上って来た物をそのまま呑みこんだ。

「・・・・ご主人・・・・一体これは・・」

そこに丁度、買い物を終わらせて帰宅してきたアダムが見えた。助けを求めようと思ったジークだが、それよりも早くアダムが全員の頭にげんこつを喰らわせた。しかし、客人にだけは手を出すなと言う常識を守り通して、ウラヌスだけはそのままにした。その後にメイド達がアダムとイヴにこっぴどく怒られたことは言うまでも無い。

その後、眠くなってきたジークは自分の頭を掻いていた。

「ジーク・・私ね・・今日は此処で泊って行くからね！」

なんだかそわそわしながら言ったウラヌスだったが、ジークは表情を変えるほどに嫌な顔をしていた。それほど嫌なことでは無かったのだが、どうしてもウラヌスの顔を見ていると、あの時のメイドの顔が重なって見えるのだ。しかも、それをウラヌスに伝えたら自分から命を絶ちかねないと考えているジークは、一層否定する言い訳を考えた。しかし、いい案は思い浮かばなかった。

「・・強制かよ・・」

今のジークには、それだけしか言えなかった。

第6説　宴（後書き）

パーティーも終わり、メイド達も眠った頃
ジークは自分の寝室でドキドキしていた。
しかし、そこへ戒めの獣が近づいてきていた。

次回　第7説　再現

第7説　再現（前書き）

眠くなっていたジークは、食事を簡単に終わらせて自分の寝室へ向かった。
しかし、今回は一人では無くウラヌスも一緒に寝ることになった。
嫌がろうとしていたジークだったのだが、ウラヌスの瞳に負けてしまう。
諦めたジークは、寝室に入るとウラヌスが速攻でベットに飛び込んだのを見た。
しかし、二人には気付けなかった。
この近くで召喚魔法が行われた事実を・・

第7説　再現

寝室に入ったジークとウラヌスは、ベットに入ろうとしたがウラヌスがベットに飛び込んだので止むなくジークは、壁にもたれかかって眠ることにした。

「ねぇ！ジークぅ！一緒に寝ようよぉ・・」
不思議に思えるほどに純粋な瞳でジークを見つめていたウラヌスだったが、ジークは無視を貫き通すつもりでいた。しかし、ウラヌスの一言にジークは動揺していた。と言うより男の子なら普通は「一緒に寝よう？」なんて聞いたら気が気で無くなりそうになるだろう。ジークにも同様の事が言えた。

「もう・・・・ジークのケチ・・オヤスミ・・・・」
ジークが無視を貫き通していると、そのうちにウラヌスが折れてベットに横になった。すると、狸寝入りを決め込んでいるんじゃないかと思うくらい素早く眠りについてしまった。そこでジークも眠ろうと思っていたが、部屋の開けていた窓から一匹の蝶が入ってきたのを見て立ちあがった。

「・・もう入り込むなよ？」
何の苦労も無く蝶を捕まえたジークは、もと来た窓から蝶を逃がして部屋の中に戻って行った。しかし、ジークはこの時には気づかなかった。窓から見える森の中で、光が飛び出ている場所があることを

「・・よぅし・・・俺も寝るか・・！！？」
ジークが再び壁にもたれかかって眠ろうとしていると、ベットからウラヌスの腕が飛び出していた。このまま寝がえりを打ったら落ちてしまう。とっさに感じたジークは、慌ててベットに行ってウラヌ

スを元の場所に戻した。

「さて・・今度こそ・・「じーくぅぅ・・」・・なんだ？」
ジークがウラヌスを元の場所に戻し、再び眠りに就こうとしていたが不意にウラヌスに呼びとめられた気がした。振り返ると、ウラヌスは眠ったままだった。どうやら寝言だったらしい。しかしこれは困った。ウラヌスは相当寝ぞうが悪いらしく、これまた1回転していた。このままでは、数分後にはまた寝がえりで落ちそうになっているだろう。

「・・なんて手の掛かる将軍なんだ・・」
ため息をつきながらベットに入ったジークだったが、やはりそうなってくると胸が異様にドキドキしていた。隣にはいつものようにウラヌスがいる。しかし、今は状況がかなり違っていた。彼女は眠っている。此処はベットの上。起きているのは自分だけ。部屋の中で二人きり（片方は眠ってる）。その他にも幾つか状況を説明する言葉はあったが、今のジークにはそれだけでもう十分だった。

「・・ふにゃぁ・・じーくぅぅ・・」
寝ぼけているのか、ウラヌスがまた寝がえりを打ってきた。そして、隣で寝ていたジークに抱きついた。ようは抱き枕のようにしているのだ。ジークからすればとても動きづらい。と言うより、ウラヌスに動きを遮断されたといった方が正しいだろう。

「・・ウラヌス・・・」
また嫌な記憶を思い出してしまったジークは、ウラヌスに近づきたく無くなって行った。しかし、その思いは消えてほしい願いから消え去った願いに変わった。ジークが記憶を思い出していた頃、屋敷の扉の方向で、扉が破壊される音が響き渡った。

「!?なんだ?」
慌ててウラヌスの呪縛から逃れて部屋を出たジークは、壁に飾ってあったひと振りの刀を取りだして下の階へ向かった。因みに言うとこの屋敷「現ジークフリート邸」は3階構造になっていて、ジークの寝室や仕事部屋は3階になっていた。リビングルームや調理室、食糧倉庫などは2階にあった。そして1階には、メイドや執事達が寝泊まりする自室があった。つまりはそこが一番危険なのだ。

「あっ!お兄ちゃん!」
ジークが階段を下りていると、下からイヴが昇って来た。どうやらジークよりも早く動いていたらしい。流石はメイド長だ。しかし、イヴの報告「なんか変な怪物が飛び込んできて・・ヤバそうだったから、安全そうなリビングルームに避難させたよ。」と聞いて、顔色が真っ青になって行った。

「くそっ!(これじゃあまるで・・)」
ジークの頭の中には嫌な想像しか連想されなかった。後ろからイヴが「お兄ちゃん!!何処行くの!」と叫んでいたが、今は構ってやれなかった。急いで階段を駆け降りたジークは、開け放たれたリビングルームに入った。その時、ジークの目の前にはあの時の光景が映し出されていた。それこそ池は無いものの、何人かの体が転がっているのを確認できた。その先には、血しぶきを浴びて真っ赤に染まった巨大な猫の姿があった。

「なんだと・・・こいつは・・」
ジークが猫の姿を見ていたが、一瞬で過去の記憶がよみがえって動けなくなってしまった。すると、猫はまるでジークをあざ笑うかのように横を通り過ぎると、階段を駆け上がっていった。その時、ジークには嫌な予感が、これまでにないくらい激しく駆け巡った。この上には、何も武器を持っていないイヴと、眠ったままのウラヌス

がいる。しかし、ここを離れてしまえば此処で瀕死になっている子供たちを救うことが出来なくなってしまう・・一生懸命考えていたジークだが、コクコクと時が流れていく。その時、リビングルームの扉の辺りから声が聞こえた。

「ジーク！」

その声はヴァイスの物だった。そして、その惨状をみたヴァイスは、急いで魔法を組み立てた。その間、ヴァイスが中心部に立ってから1秒。流石だ。これで安心出来たジークは、急いで怪物を追いかけた。本当なら、もうイヴが切り捨てられている。しかし、ジークが3階に上がると、そこには想像していた風景とは違う場面があった。

「・・手を出すなぁぁぁ！！！」

そこでは、アダムと怪物が戦闘を繰り広げていた。その直ぐ傍では、イヴが腕を抱えて座っている。どうやら怪物に嬲られていたらしい。傷跡は浅く、自分で処置を施していた。しかし、イヴの再生魔法で回復するスピードがおかしい。なかなか塞がらなかったのだ。見れば怪物の爪から微量な液体が流れ出ていた。恐らくは毒だろう。

「・・！アダム！気をつけろ！」

とっさに叫んだジークだったが、その言葉もむなしくアダムが怪物に叩き飛ばされた。壁に当たって停止したアダムは、気を失っていた。すると、怪物がゆっくりとアダムに近づいて行った。

「・・させるかぁぁぁ！」

持っていた剣を持ち上げて、怪物に斬りかかろうとしていたジークだったが、怪物はニヤリと笑ってその場を離れた。そして、ジークの寝室の方向へ向かった。

「！！マズイ！！！！」

ジークの胸ははち切れそうなほど高鳴っていた。そして、たどり着いた頃には怪物がウラヌスに爪撃を喰らわせようとしていた。こんな所で悪いが、作者はこんな時にはこう言いたい。「獲物を前に舌舐めずり・・三流のしそうなことだな。」

「やめろおぉぉぉぉ！」
大振りで怪物に斬りかかったジークだったが、間に合いそうに無かった。寝たままになっているウラヌスの首に爪が掛かった次の瞬間、その手にナイフが刺さって怪物は手を引いた。見ると、部屋の入り口にイヴが血を吐きながら立っていた。

「イヴ！大丈夫か！」
そう言おうとしたジークだったのだが、先にアダムがそのセリフを叫んでいた。一瞬気絶したのでは？と思ったジークだったが、そんなことは後で良かった。ジークが剣を見ると、その刀身が削られていった。すると、アダムの周りに剣が円を描くように並んでいた。更にはアダムの後ろから剣が無数に現れた。

「喰らえ！化け物！」
アダムが剣を操作して全てを怪物にぶち当てた。しかし、怪物は全ての剣を覇気だけで抜き取ってしまった。これでは全く意味が無い。しかも怪物も遊ぶ気が無くなったのか、また腕を振り上げた。

「させねぇよおぉぉぉ！」
怒りに満ちた瞳で、ジークが怪物の腹部に削れた剣を突き刺した。しかし、削れていたからなのか怪物の体に刺さり始めた所で折れてしまった。

「こんちくしょおぉぉぉ！！」

悔しさのあまり叫んだジークだったが、怪物は腕を振り落とした。その先にはウラヌスの顔が無防備になっている。もう駄目かと思ったジークだったが、とつぜんにウラヌスの手がそれを阻止した。結構な力を入れているであろう怪物の手を片手でだ！

「危険を察知・・これより、護衛対象の防衛に入ります。」
寝言のように呟いたウラヌスだったが、その力は強大だった。アッという間に怪物の尻尾をねじ切ってしまった。その時の血しぶきが部屋中に飛び散ったが、怪物は痛みに悶えていた。どうやら死にそうでは無いらしい。すると、すかさずウラヌスが怪物の首をねじ切った。どうやらもう終わったらしい。それにしてもあっけなかった。以前この館を襲った時には対処も出来なかったのが、今ではこのザマだ。そして、ジークは喜びと悲しみ、ついでに恐怖の感情を同時に感じていた。あの時のメイドの仇が、自分で討ったわけでは無かったが、代わりにそっくりのウラヌスが刺していた。だが、こんなことをしてもメイドが帰って来ないと知っているジークは、少し哀しんだ。同時に、こんなことが出来たウラヌスに驚きもしていた。

「・・殲滅目標の沈黙を確認・・ウラヌスモード（完全絶対防衛機能）・・解除します・・」
そう呟いたウラヌスは、力が抜けたように倒れこみそうになった。しかし、倒れたりはしなかった。ジークが素早く受け止めたのだ。すると、ウラヌスは眠っていた。しかし、ジークが受け止めたことによって目を覚ました。

「・・うぅん・・あれ？皆どうしたの？」
そのウラヌスの声には、先程の機械的な喋り方は感じられなかった。しかし、ジークには今更気づいた危険信号があった。ウラヌスの寝間着は、薄い素材でできたワンピースだった。それがジークの視線に飛び込んできたときには、殆どはだけて胸が見えていた。しかし、

この状況を打破するすべはジークには無かった。

「・・ジークぅ・・貴方から抱きついてくるなんて・・ウフフ・・」
嬉しそうな表情を浮かべるウラヌスだったが、ジークは不安要素を思い出した。リビングルームで倒れていた子供たちだ。あの中には、イグニスやチェリスの姿もあった。急いでリビングルームに行こうとしていたジークだったが、下からヴァイスがやってきた。

「みんな無事だぜ？・・もう何の心配も・・あ・・え～と・・ごゆっくり！」
無事を伝えたヴァイスが目を開けると、そこには抱き合うアダムとイヴの姿と、同じように見えなくもないジークとウラヌスの姿だった。そして、それに何故か怖気づいたヴァイスは、セリフを選ぶように一拍置いてから階段を駆け下りていった。

「はぁ・・変なうわさが広まりそうだし・・こいつの片付けも・・？」
ジークが振り返ったが、そこには怪物の姿は無かった。まるで煙のように消えていた。それに戸惑ったジークだったが、あまり気にしないことにしていた。

「ふぅん・・あいつもやるようになったわね・・さっ！お遊びも終わったことだし帰ろっと！」
ジーク達がため息をついていた頃、部屋の外では一人の少女が箒に乗りながら宙を舞っていた。部屋の中を覗き込んでいた少女だったが、飽きたのかそのまま方向を変えて帰って行った。その少女を、ジーク達は認識することが出来なかった。

第７説　再現（後書き）

メイド達を全員、学院の保健室に運びこんだジーク達
そこには機材が豊富に積まれており、どんな治癒でもきっと可能だった。
そこから、ヴァイスの医師としての本領が発揮されていく。

次回　ＬＡＧＮＮＡＬＯＫ　第８説　喜び

第8説　喜び（前書き）

怪物の襲撃を何とか防ぎ切り、ついでに仇まで討てたジーク
その後、館のメイド達を学院の保健室にまとめて連れて行った。
そこには色々な手術方法に対応した設備が完備されており
ヴァイスの腕の見せ所でもあった。

第8説　喜び

激戦の末、怪物を倒したジーク達はメイド達をまとめて馬車に乗せて学院目掛けて走らせた。幸いにも今は夜中だった為、人通りが少なかったので時間を取ることも無く学院にたどり着いた。

「早く医務室・・いや、保健室へ！」

ヴァイスが、呼んでおいた助手や生徒にメイド達を運ばせた。その後を追うようにヴァイスも全力疾走で保健室に向かって行った。その後にフラフラしながらも降りたジーク達は、改めて学院を見渡していた。すると、校舎側から聞き覚えのあるいかにもやんちゃそうな声が聞こえてきた。

「やっぱり！・・・やっぱりジークだ！」

その声の主は、予想を見事に的中してルイズだった。そのルイズがジークに飛びつこうとしたが、いつもなら手で止めていたジークが、今回は何もできなかった。そのまま飛びついたルイズだが、何処かつまらなさそうな顔をしていた。

「ジーク？ねぇ、ジーク！どうかした「うるさい！」・・ごめん・・」

何度もジークに話しかけていたルイズだったが、急にジークに怒られて黙り込んでしまった。ジークも自分が悪いとは思っていたが、謝る気になれないでいた。無理もない。自分の家の使用人の大半が大けがを負ったのだ。それを心配しない主人など、主人とは呼べない。

「・・・悪かったな、怒ったりして。ちょっと今は止めてくれ・・・」

悲しいような表情をしたジークだが、それでも必死に元気づけようとルイズは張り切っていた。流石は水の妖精だ。その特性の通りの事を遵守しようとしている。しかし、ジークにはそれがいつもと同じように子供がじゃれてくる程度にしか感じられていなかった。

「ごめんね・・ルイズ。ジークも色々と考えてるの。邪魔はしないであげましょう？」

ウラヌスが、眠たそうにゆっくりとルイズを説得した。すると、ルイズは素直に頷いてそこから口をとじていた。そして、心を決めたジークは保健室へと向かった。

一方その頃、ヴァイスはまるでパフォーマンスでもしているかのようにメイド達全員の治療をまとめて一気に行っていた。

「・・次！二番メス！「ハイ！」・・そっち！輸血パックの用意！「ハイ！」・・縫合頼む！」

物凄いハイペースで治療をして行ったヴァイス。その成果もあってなのか、手術開始から３０分で全員の手術が終わった。そのスピードに、助手たちも唖然としていた。しかし、唖然としていたとは言っても、ちゃんと手伝いはしていた。

「オペ終了！皆！お疲れさん！」

ヴァイスが最後の一人、イグニスの怪我の縫合を終えてマスクを外した。これで全員の無事が確保された。それを知らせようとしたヴァイスは、保健室（現状はまんま手術室）から出てジークに無事を伝えようとした。

「・・・あれ？ジークは？」

部屋を出たヴァイスは、隣で座っているであろうジーク達を見た。

しかし、そこにジークの姿は無く代わりにウラヌスとルイズが待ちくたびれたのか眠っていた。それも仕方がない。今の時間は夜中だ。普通だったら、こんな時間に起きている人物など少ない。それこそ夜行性のドワーフなどは別だが、この時間に起きている人物はヴァイスや助手たちだった。

一方ジークは、改めて懐かしく感じた学院の中を歩いていた。

「此処もかなり変わったなぁ・・・」

ジークが見つめているのは、樹齢3千年を超えているといわれる大きなマナ（エネルギー）の木だった。ここには、ジークにとって大切な思い出がある大事な場所だった。そのことを語るのはまた今度となる。昔の記憶を思い出していたジークだが、不意に背後から誰かの気配を感じて振り返った。

「あらら・・見つかっちゃった・・・」

そこには、箒に乗ってフワフワと浮かんでいる女性がいた。見た目からしてジークと同じか一つ下くらいだった。なんにせよ、不審な女性がジークの背後に浮かんでいた。少々苛立っていたジークは、その少女を無視して立ち去ろうとした。

「あれれぇ？いいのかなぁ？・・仇を討ちそびれた英雄さんにぃ・・・何が守れるというのかしら？」

一瞬何のことか分からなかったジークだったが、後ろに出現した召喚陣に驚いて振り向いた。そこには、先程ウラヌスが倒したと思っていたあの怪物が立っていた。その瞬間、ジークは悟った。この女性が、さっきの襲撃の張本人であり、同時に昔におきた襲撃事件の首謀者であることが。

「この・・・なんでこんな時に・・・」

憎しみに身を任せていたジークだったが、こんな時に限って恐怖から足が動かなかった。どうやらこの恐怖は、この怪物を消滅させない限りは消え去ってくれないようだ。

「行きなさい！主人に忠実な怨霊（オルトロス）！」

女性が怪物に指示を出した。すると、怪物が女性の指示に従って走り出した。その速度はかなり早い。あっという間にジークとの間合いを詰められた。まずいと思ったジークは、オルトロスの爪撃を間一髪でかわした。

「まだよ！おるとｒ・・うにゃ！」

続けて指示を出そうとした女性だったが、何かが彼女の乗っていた箒をたたき落とした。見れば軽く７００ｍは離れている校舎から、狙撃銃を構えているエカテリーゼの姿が見えた。そのことに感謝しながらも、ジークはその隙をすかさず突いて彼女の腕を使えないようにがっしりと掴んだ。

「あぁん・・仲間がいるなら先に「黙れ！」・・ケチ・・」

手が塞がれた状況では動く事がまずいと分かっているのか、オルトロスは動こうとしなくなった。それにしてもこの女性には驚かされる。セリフや口調を聞いていると、どうやら遊びの感覚でこんなことをしでかしているらしい。そんなことが分かってしまうと、ジークは呆れそうになってしまった。

「はぁ・・・だいたいなんでこんな「強いね！貴方！」・・・なんだと？」

ジークがため息をつき、説教を言おうとしていた時、不意に女性から声が掛かった。その内容は、短くはあったがとにかく褒め言葉だった。一瞬罠かと思ったジークだったが、女性はジークがうっかり手を放してしまっても抵抗はしなかった。それどころか、話を潤滑

に進めたいためなのかオルトロスを戻していた。いつの間にか姿が消えていたので間違いないだろう。

「私の名前はミリア。ミリア・ホークアイ。実は今、金銭的に困っているの。だから・・「・・雇ってほしいと？」話が早い！流石は私の認めたマスターd「断る！！」・・・」

自己紹介を済ませたミリアは、いきなり自分の要求を言ってきた。かなりふてぶてしいと思ったジークだったが、話を聞くと何が言いたいのか直ぐに分かった。そこでその要求を聞いてみたジークだが、どうやら当たりだったようで、ミリアは喜んで子供のようにジークに抱きついた。これではどちらが勝負に勝ったのかわかりゃしない。

「お前なぁ・・人の気持ちって考えたことあるのか？普通、自分の使用人を殺されかけて、その前には自分の信頼していた使用人たちが殺された。その張本人を雇うやつが・・「しょうがないじゃない。私に身近な人間なんていなかったし・・」・・・すまん・・・」

いつものように説教を開始していたジークだったが、途中でミリアが身の上話を話し始めて嫌な気持ちになったジークは、なんだか分からずに謝っていた。すると、校舎の方からウラヌス達がこっちにやってきていた。すると、ミリアが「お願い！私が主犯だってことは内緒に・・」と言い出したので、ジークは皆に聞こえるように大声で叫んだ。その時、涙目になるミリアが見えたがジークは放っておいた。その後、ミリアが全員から説教を受けたことは言うまでも無かった。というか説教で済んだことに感謝すべきだとも思う。

「・・でね、ジーク。これからあの子、ジークの屋敷で雇ってあげてくれない？」

不意にウラヌスから頼まれたジークは驚いた。仮にも殺されかけていたウラヌス自身がそんなことを口にしたのだから。しかも、ミリアが言うと簡単に断れることを、ウラヌスが言うとジークは断りき

れなくなってしまった。

「・・・仕方ない・・・分かったよ・・・」

難しそうな顔をしてしぶしぶ了承したジークだが、いつの間にか後ろにミリアが立っており、その言葉を聞いた時に凄く良い表情で笑ってジークに抱きついてきた。それを見たウラヌスもジークに抱きついていた。いつもの光景を取り戻していた所で、３人は校舎の中に向かって歩き出した。

第8説　喜び（後書き）

本来ならば殺人などの罪で処罰されるべきなのであろうミリアだったが
悪気が無かったという理由、そしてとびっきりの笑顔に負けたジーク
そして、ミリアはそれぞれの人たちに謝りに行くのだった。

次回　第9説　謝罪

第?.説　謝罪（前書き）

夜も更けた学院の中、ジークにくっついて離れない
ミリアとウラヌスを受け止めていたジークは
メイド達の様子が気になってびょう・・保健室へ足を運ぶ。

第?.説　謝罪

第?説　謝罪

風が少し冷たく感じられる中、ジーク達は嫌になる程にくっついて歩いていた。初見の人物がいたらこう呟いているだろう。「歩き辛いだろ・・・」と。

「フフフッ・・・ジークぅ！」

ミリアが満面の笑みを浮かばせて、掴んでいたジークの腕の力を強めた。これが男並みの力ならきっとジークの肩は砕けていたかも知れないが、やはりミリアも女の子だった。そこまで力が強いわけでもない。どっちかと言えばジークは別の場所を気にしていた。ミリアの胸は、ウラヌスよりも幾らか大きな形をしており、それがジークの腕に押しつけられた状態となっていた。こんな状況でドキドキしない馬鹿は鈍感では無い。死んでいるのだ。

「ジークぅ！こっちも見てよぉ！」

寂しそうな表情でジークを見つめたウラヌスも、掴んでいたジークの腕に力を込めた。そうしてまたもやウラヌスの胸が当たってジークが気にしてしまう。の連続だった。暫くその状況が続いていたが、やっとの思いで保健室にたどり着いた。

「さぁ・・入って・・って、もう入ってる・・」

先にミリアを保健室に入れようと思ったジークだったが、そんな気遣いは不要だった。ジークが気づいた頃にはもう既にミリアは保健室の中に行っていろんな人々に平謝りしていた。

「・・終わるまで待ちましょう？ねぇ？ジーク。」

珍しく大人しい口調で喋ったウラヌスだが、やはり他の目的があるのだろう。例えばジークと二人きりになっているとか、そんなとこ

ろだろう。その証拠に、ウラヌスはミリアがジークの下を離れると同時に腕に力を込めて喜びを示していた。

「・・・・終わったみたいだな・・って！いきなり飛びつくな！」暫く様子を見守っていたジークだが、全員に謝り終わったミリアはいきなりジークに飛びついた。それをみたウラヌスが必死にミリアを引き離そうとジークを引っぱり、それに対抗する形でミリアもジークを引っぱった。するとどうなる？そうさ！こうなるのはもはや必然だ。

「いてててて！ち・・千切れる！止めっ・・・ないかぁぁ！」コントの様な動きが暫く続いていたが、遂にジークの堪忍袋の緒が切れてジークが怒鳴った。しかし、直後にヴァイス達に「大声出すな！」と注意を受けてしまったのは必然だ。

「全く・・二人とも・・・俺をなんだと思ってやがんだ・・・」やっと離れてくれたウラヌス達は、しょぼんとした表情のまま壁に凭れかかってそのまま夢の世界へ逃避した。どうやらヴァイスの怒った表情が怖かったらしい。二人の目には涙が浮かんでいた。うっすらとでしかなかったが、ジークには十分に判断できた。

「・・・俺も寝るか・・・・ヴァイス・・あとは任せたぞ・・・・・・ｚｚｚｚ」

立っていた場所に座り込んだジークは、そのまま目を閉じて眠りに付いた。その間、僅か１０秒。

「・・全く・・いつもこれだ・・みんな！片づけに移ろう！」

ため息をつきながらもヴァイスは助手に的確に指示を出していった。このあたりは流石は先生と言っておこう。

翌日～鳥の鳴き声は可愛いものだ。～

「ふあぁ～あ・・・よく寝れたよぉ・・・」

先ず最初に起きたのはウラヌスだった。もともとスヤスヤと寝ていたのだから当然だろう。ウラヌスが目を覚ますと、隣ではジークが壁にもたれて寝息を立てていた。その寝顔は可愛いもので、その表情を見ていると彼が将軍職に付いているなんて微塵も感じれなくなる。

「フフッ。ジーク・・・隙ありだよ・・・」

ジークが眠っているのをいいことに、ウラヌスはキスをしようとした。しかし、唇が触れる手前で動きが止まった。理由は色々ある。まず、こんなことをしてジークに万が一にでも起きられたら絶対に嫌われると考えてしまっていた。他にも、これがキスと言えるのかとか、こんなもので自分の心が満たされるのかなどの思いが交差した。

「・・・・〔やっぱり・・・止めとこう・・〕・・」

恐怖でたじろいでしまったウラヌスは、くっつきかけた唇を戻して行った。すると、暫くしてからジークが目を覚ました。しかし、ウラヌスの表情に気づく事は無かった。ウラヌスの表情は、どう表現すればまともに聞こえるか分からないが、とにかく失意の表情をしていた。

「・・うぅうん！・・はぁ！おはようご主人！」

元気よく挨拶したミリアだが、ジークはミリアの発した「ご主人」という言葉に違和感を持った。そして暫く時間を置いてメイド達が起き上がった。どうやら生死の境をさまようものは一人もいなかったらしい。それが分かったジークは一安心した。そして、メイド達全員を校舎に呼ぶようミリアに指示したジークは、一足先に校舎に

来た。すると、そこには夕べに援護射撃を行ってくれたエカテリーゼの姿があった。どうやらジークの事を待っていたらしい。

「・・やっ！夕べは助かった。改めて礼を・「何なんですか？貴方は！」・・・えっ？」

謝罪と感謝を込めてジークが礼を言おうとしたが、エカテリーゼがそれを遮った。その表情はどこか泣きそうになっていた。所謂「涙目」だ。

「貴方は・・・一体どれだけの女性を誑かせば気が済むのです！昨夜にしてもそう！なんなんですか！あの女性は！あんな破廉恥な格好で私のジーク様に近づいて・・」

怒ったように話を進めていたエカテリーゼだったが、言葉の所々に誤解を生みそうな言葉が混入されていた。それを自分で言っておきながら思い返して恥ずかしくなったのか、エカテリーゼは強気だったのを一変させて逃げ出してしまった。

「・・・何だったんだ？あの娘・・まぁ、今はこっちの方が大事だな。」

そういって気分を切り替えたジークは、胸を張って・・とはいい難いが、とにかく校庭の中央に向かって歩き出した。その頃には、もうメイドの子供達も外に飛び出して来ていた。

第?説　謝罪（後書き）

きっと私たちは間違っていない！
そんな気持ちを逸らせて小説を書きたいところですが
此処でキャラクター紹介の分岐となります。

次回　第１０説＋断説　メンタリウル大図書館

第１０説＋断説　メンタリウル大図書館（前書き）

まだまだ小説の話を進ませていきたいですが
ここらでキャラクター紹介を進めます。

このページは随時更新となります。新たなキャラクターなどが登場すれば
そのキャラクターを書き足す方式を取りますのであしからず。

ＬＡＧＮＮＡＬＯＫ　キャラクター書庫

登場種族の見分けです

人間：我々と何も変わらない普通の人間
神：人間と殆んど変わらない。ただ、少し能力（ちから）があるだけであったりする。
妖精：自然現象の具現した者。妖精に死は無い。ただし、一度死ぬ形になると自然に帰ってまた蘇る。因みに力の強さは並びにしてみるとこうなる。
月→火＝水→金⇒木＝土⇒日
これはぱっと見ただけの星の大きさに比例している…筈！
司る感情は次の通り
月：哀しみ　火：喜び　水：癒し　木：恐怖　金：好奇心　土：怒り　日：純粋さ
エルフ：見た目では人間と大差ない。目印があるとすればそれは耳が尖っていることぐらい。人間よりも頭が良い。しかし、比較的人間より非力である。筋肉の発達が未熟な所為でもあるらしい。
ドワーフ：平均身長が人間よりも小さい種族。他の追随を許さない程技術力が高い。特に武具の生産は十八番で、質の良い武器は大概

がドワーフの手によって鍛えられたもの。人間と比べるとかなりの怪力。筋肉の発達が活発。但し、表面的な部分には出てこない所謂「細マッチョ」である。

第１０説＋断説　メンタリウル大図書館

名前：ジークフリート・ドラグルス・ラ・ガルトバルト
年齢：２３才　　此処で注意事項！「神と人の年齢は一致します。ただし妖精は自然現象の具現化なので年齢表記をしません。しても見た目年齢です」
性別：男性
種族：神
身長：１７８ｃｍ
体重：６８ｋｇ
髪型：戦闘に不向きとされる長髪を三つ網にしている。鋼の錬金術師のエドのような感じだ。
髪の色：黒に近い紫
目の色：黒に近い灰色
目つき：丸と尖りの中間（すこし尖りより）
趣味：見晴らしのいい場所での昼寝
性格：軍師に必要とされる頭脳と、戦士に必要とされる力を持つ将軍職に就く青年。比較的クールな性格だが無口では無い。人との交流を、どちらかと言えば避けているところもあるが本質は人との交流は盛んである事が多い。自宅を突然襲撃されると言う悲惨な過去を持っており、その事件で目の前で死んだメイドに瓜二つのウラヌスを見るたびにトラウマになってその時の記憶が思い出されてしまうと恐怖で動けなくなってしまう事もしばしば。ウラヌス等の多数の女性に好かれているが、本人が鈍感なので恋愛に発展しない。一応、社会的な位置としては最高位に届きそうな程に上流だが、ジーク本人が貴族のように無駄に威張り散らすような事は無い。なにしろ本人も正直言って貴族を嫌っているのだから。そんなこんなでもこの物語の主人公である。〔追記：総受けの運命が確定〕
特殊事項：主人公補正無視。

ＣＶ：諏訪部　順一（以下敬称略）
属性：空回りクール青年
想像時類似キャラクター：ハガ〇ンのエド〇ード

名前：ウラヌス・デ・フリジーデリヒ・クリスト
年齢：２２才
性別：女性
種族：神
身長：１５３ｃｍ
体重：４７ｋｇ
髪型：腰に掛かる程のロングヘアー。髪質がサラサラしているので髪が良く風で靡く。頭の頂上からアホ毛が数本程の束になって飛び出ている。
髪の色：赤みがかった紫
目の色：濃い赤色
目つき：普通
趣味：ジークと一緒にいること
性格：いつも明るく振る舞うことが好きな女性。ジークが好きで、近くで見つけると無性に抱きつきたくなる癖がある。しかし、彼女の心の奥底には、過去の恐怖から逃げたいと思う意思が疼いているためなのか明るい性格でいようとしている事もある。この物語のメインヒロイン・・の筈である。しかしその割には精神年齢が幼いように見える。登場人物的には年齢は上な方なのに・・。
特殊事項：心の底からジークのことが好きになる（後後・・）
ＣＶ：折笠　愛
属性：おバカ恋愛一筋少女
想像時類似キャラクター：ＣＬＡ〇ＮＡＤの髪を括っていない活発的な早〇さん

ヴァイス・リッツェル

年齢：２１才
性別：男性
種族：ハーフエルフ〔エルフの母親と、人間の父親の子供〕
身長：１７０ｃｍ
体重：６１ｋｇ
髪型：ショートカットを無造作に手櫛で揃えたような感じ。天然パーマ
髪の色：黒髪
目の色：闇眼
趣味：若い女性へのナンパ行為
性格：所謂女たらし。女性の好みに煩いが、気に入った女性には声をかけずにはいられなくなる始末。友情に忠実で、友人が頼みごとをして来るとなかなか断れない性格。ジーク達とは学園時代に出会っており、古くからの友人となる。この物語の縁の下の力持ち（自称）。
特殊事項：恋人居ない歴＝年齢
ＣＶ：寺島　拓篤
属性：天才と同時に軽い青年
想像時類似キャラクター：絶対○憐チル○レンのスケベ医者（？名前忘れた

名前：アリス・クラインフォード・リリ・カイザ
年齢：１５才
性別：女性
種族：神
身長：１３８ｃｍ
体重：２９ｋｇ
髪型：ショートカットで前だけ揃えてジークの真似をしていたのだが、今ではその痕跡が見えなくなっている。
髪の色：金髪だったのだが、少し色が抜け落ちてしまって今はベー

ジュになっている。これも色々な細胞の死滅が原因と考えられる。
単に色素が抜け落ちただけでなく（以下略
目の色：金色
目つき：少し尖り気味
趣味：無し（現段階では。）
性格：少女と呼ぶにふさわしいように明るい活発な女の子だった。
しかし、父親の死後にショックから細胞の死滅を引き起こしてしまった結果、感情そのものが無くなってしまった。喋れない訳ではないのだが、心が籠っていないのが誰にでも分かってしまう。子供が背負うには重すぎる過去を背負った結果だが、自身でこれを受け止め切れた訳ではないからこそ、このような事になっているのだった。
特殊事項：サブヒロイン補正あり。回復予定。
ＣＶ：田村　ゆかり
属性：無表情ロリッ子少女
想像時類似キャラクター：感情を失った東方ｐｒｏ○ｅｃｔのア○ス・マーガ○ロイド

名前：ルイズ・ウォルター
年齢：見た目１３才
性別：女性
種族：妖精　　力は七曜の水
身長：１３５ｃｍ
体重：２９ｋｇ
髪型：ジークと同じようにショートカットにしている。
髪の色：薄い水色
目の色：水色
目つき：丸っこい
趣味：友達と遊ぶ。悪戯を実行
性格：非常に活発な女の子。妖精なのだが考え方が幼児的でどこで間違えたのか、間違った知識を持っていたりする。悪戯をすること

も好きなのだが、それが結果的に人々を幸せへと導いている。
特殊事項：死亡フラグ絶対回避補正。
ＣＶ：竹内　順子
属性：とにかくおバカ
想像時類似キャラクター：東方〇ｒｏｊｅｃｔのチ〇ノ

名前：エカテリーゼ・ブレテル・イリア
年齢：見た目１６才
性別：女性
種族：妖精　　力は七曜の土
身長：１５６ｃｍ
体重：４５ｋｇ［本人いわく、体重を無茶苦茶気にしている。
髪型：まるで「私は貴族です」と言わんばかりに整えられたロングヘアー。
髪の色：赤茶色
目の色：山吹色
目つき：少し尖り気味
趣味：裁縫
性格：如何にもと言う程のお嬢様気質。他人を見下したような口ぶりをしているが、実は人が嫌いと言う訳では無く、むしろ好きな方なのだ。しかし、所謂愛情の裏返しによって刺々しい態度を取ってしまうことになっている。
特殊事項：射撃適正Ｓクラス。大会での優勝経験あり。
ＣＶ：岩男　潤子
属性：お嬢様
想像時類似キャラクター：

名前：プレシア・エリーズ・レシテア
年齢：見た目１０才
性別：女性

種族：妖精　　力は七曜の木
身長：１３０ｃｍ
体重：２４ｋｇ
髪型：もともとは長い髪を、括ってツインテールにしている。一見ツインテール＝ツンデレの観念を持っている人物から見ればそう見えなくもないが、実際は大人しい少女。
髪の色：銀色〔白髪のようにも見えるが、白髪とは違って文字通り銀色に輝いている。〕
目の色：銀色
目つき：丸っこい
趣味：勉強（特に数学分野を特化）
性格：人見知りがとてつもなく激しい少女。ルイズを姉のように慕っており、ジークを兄のように慕っている。プレシアの心許せる相手はルイズとジークのみとのこと。
特殊事項：悲劇属性付加予定
ＣＶ：中原　麻衣
属性：恥ずかしがロリ
想像時類似キャラクター：

名前：アダム・アレイスタ
年齢：１８才
性別：男性
種族：人間（能力持ち）
身長：１６５ｃｍ
体重：５４ｋｇ
髪型：ショートカットを三カ月放っておいた結果、そこそこに伸びている。しかし、ジークが帰ってくるという手紙を見た時に自分で切っていたので今ではショートカットに戻っている。要はショートカットが少し伸びた位
髪の色：淡い銀色

目の色：淡い青色
目つき：至って普通
趣味：色々。
性格：ジークフリート邸の執事長をしているだけあってしっかりしている。料理は超美味・掃除もプロ以上に上手・仕事はテキパキとこなす・運動神経抜群。どれをとっても優秀なのだが、唯一頭が悪いという点を除けば、汚点は何処にも無かった。頭が悪いと言っても知的障害を持っているわけでは無く、ただ単に馬鹿なのだ。能天気とも言うかもしれない。
特殊事項：恋愛要素あり。
ＣＶ：辻谷　耕史
能力：刃を束ねる刀身（ブレード・リーダー）
身の回りに存在する金属や鉄を自分の周りに集結させて新たに武器を再構築する。その際、体に多大な負担が掛かるが、アダム程に体を鍛えていれば多少は問題ない。
属性：体力バカかつ天才

名前：イヴ・リートウェル
年齢：１７才
性別：女性
種族：人間（能力持ち）
身長：１４８ｃｍ
体重：４０ｋｇ
髪型：ショートカットで揃えているが、唯一右側の髪だけは残して三つ編みにしている。
髪の色：薄い銀色
目の色：薄い灰色
目つき：普通
趣味：新料理研究
性格：明るい性格なのだが、暗い過去を思い出すと暗い表情になっ

てしまう。たまにずば抜けて天才的な妙案を思いついたりする。しかし、いつもはメイド長としての仕事をこなしている。ジークの呼び方は「お兄ちゃん」これはメイド全員がそうなっている。だが、それはイヴが強制していることではないらしい。皆がみんな、ジークをお兄ちゃんだと思っていたいらしい。

特殊事項：恋愛要素あり。

ＣＶ：豊口　めぐみ

能力：時の破壊者（カウント・アンチ）

時を止めて自分だけが動ける世界を作り出す。しかし、体には多大に負担が掛かるのであまり使おうとはしない。しかし、緊急時にはバンバン使用する。有効時間は、イヴで数えて１０秒間。某メイド長でも無ければ仮面ライダーでもありません。

属性：ニコニコ少女

名前：イグニス・フィア・ウォンテリット

年齢：見た目１９才

性別：女性

種族：妖精　　力は七曜の火

身長：１５７ｃｍ

体重：４７ｋｇ

髪型：肩に掛かる程度にのばした髪を真中だけ括ってポニーテールを作っている。

髪の色：明るい紅

目の色：灼眼

目つき：ちょっと尖り目

性格：仲間意識の強い性格で、誰かが傷付いていた時などは真っ先に助けようとしたがる。しかし、当の本人は非力なので空回りに終わる。以前は他の屋敷に勤めていたらしいが、その時の主人に色々と痛めつけられていたので、豪族に対して執念とも言える偏見を持っていた。しかし、ジークが自分の身を呈してまで自分達の面倒を

見てくれたことに感激して一目ぼれした。
特殊事項：苦労人の予感。
ＣＶ：田中　理恵
属性：苦労メイド

名前：チェリス・ギュント
年齢：８才
性別：女性
種族：エルフ
身長：１２５ｃｍ
体重：２１ｋｇ
髪型：膝下まで届くようなロングヘアー。手入れが大変なのか、時折髪の毛をいじる姿が確認されることがある。しかし、手入れが行き届いているからこその靡き方をしているのも確かだった。
髪の色：淡い金色
目の色：緑眼
目つき：クリっとしている
趣味：技術開発
性格：口数の少ない少女。しかし、無口な訳では無くただ単に恥ずかしくて喋りたくないだけらしい。そのことはいつも仲良くしているイグニスが聞いていた。他のメイドと同じように捨て子だったのをイヴが拾ってきた少女の一人。
特殊事項：館の技術者説あり。
ＣＶ：かない　みか
属性：カワイロリメカニック

名前：ミリア・ホークアイ
年齢：２２才
性別：女性
種族：人間〔魔力持ち〕

身長：１５７ｃｍ
体重：４９ｋｇ
髪型：手入れの行き届いてないようにウェーブのかかったロングヘアー。横は三つ編みに括って、先の方を黄色いリボンで止めている。
髪の色：少し薄い金髪
目の色：闇眼
目つき：普通
趣味：悪戯をする
性格：家を持たない所謂ホームレスの少女。その理由は過去の災害によるものなのだが、その他に彼女自身が家に住もうと考えていなかったらしい。いつも愛用の箒を持っていて、それを使って飛ぶこともできた。実に魔女らしい服装をしている。が、流石にメイド姿の時は真っ黒では無い。
特殊事項：魔法使用可能。使役する召喚獣はオルトロス。
ＣＶ：桑原　法子
属性：おてんば魔女っ子メイド

名前：ファリス・ゴルト・ターシス
見た目年齢：９才
性別：女性
種族：妖精　力は七曜の金
身長：１３５ｃｍ
体重：２９ｋｇ
髪型：肩まで伸ばしたミドルヘアー
髪の色：金髪
眼の色：黒眼
目つき：丸クリ目
趣味：探検
性格：好奇心旺盛な少女の妖精。館の中ではいつもソワソワしながら廊下内をウロウロしている事が多い。その時には目を輝かせるよ

うにして嬉しそうな顔をしているらしいが、ジークは見たことが無かった。楽しい事にはいち早く勘付いて飛び付く性質なので、ごく稀にお使いから帰ってこないこともあった。なので、ファリスがお使いを頼まれるときはいつも誰かが一緒に着いて行くことになっている。見た目が犯罪級の幼さの為か、背後からの荒い息遣いが聞こえることもあるが、それがファリスの耳に届く前に付き添いのもう一人が成敗しているのでなんら問題は無い。皆と同じくジークを好いているが、ファリスの恋の定義は歪みに歪み切っている。

特殊事項：たまに姿を眩ませる事がある

ＣＶ：折笠　富美子

属性：おてんばロリッ子メイド

名前：クルス・エイリス

年齢：１０才

性別：女性

種族：ドワーフ

身長：１２６ｃｍ

体重：２３ｋｇ

髪型：腰まで伸ばしたロングヘアーが風になびくと綺麗な曲線を作る。

髪の色：少し淡い黒色（濃いグレー）

目の色：蒼眼

目つき：丸っこい

趣味：人形遊び

性格：人と真正面から向かい合うだけで恥ずかしくなってしまう純情な女の子。ドワーフなので力は強い。それこそ楽々とグランドピアノを持ち上げるように。そこにブラコンが介入することによってジークを見ると直ぐに顔を赤くしてしまう。

特殊事項：ヤンデレ属性付加可能。

ＣＶ：川上　とも子

属性：恥ずかしがロリメイド

名前：ニンフ・チャイル
年齢：見た目１２才
性別：女性
種族：妖精　力は七曜の水
身長：１２８ｃｍ
体重：２３ｋｇ
髪型：ツインテール。
髪の色：濃い水色
目の色：薄い水色
目つき：少し尖り目
趣味：ポエム作成
性格：凄く分かりやすいツンデレ。褒められると素直に喜ぶのだが、怒られるとそれがどんな理由でも反論したくなる。そんな性格。妖精としては珍しく、人に近い性格になっている。妖精自体が人間と同じような考え方をするが馬鹿なので理解に時間がかかるのに対して、ニンフは普通よりも頭が良いので考え方も人と同じようになっている。
特殊事項：世界に生まれてまだ数年しかたっていないらしい。
ＣＶ：平野　綾
属性：ツンデレ秀才メイド
想像時類似キャラクター：そらの〇とし〇ののニンフ

名前：イリア・リーチャ
年齢：１１才
性別：女性
種族：人間
身長：１４３ｃｍ
体重：３５ｋｇ

髪型：ショートの伸び掛けくらいの長さ。
髪の色：金髪
目の色：緑眼
目つき：丸っこい
趣味：探検
性格：おっとりとした少女。ボーっとしていることが良くあるが、何も考えていない訳ではない・・・と信じたいものだ。ずば抜けて明るい性格を活かしてムードメーカー的な役割を担っている・・訳でも無かったりした。この調子でいけば不思議ちゃんのカテゴリーにカテゴライズされてしまう。口調が僕なのは、物心ついた頃から一人称が僕だったらしい。親に捨てられて彷徨っていた所をイヴが拾ってきた。その間の生活は苦しかっただろうに、イヴに拾われた時には明るい笑顔で礼を述べていたらしい。
特殊事項：暗い過去を持っている。無断外出癖あり。
ＣＶ：宮川　美保
属性：僕っ子ロリメイド
想像時類似キャラクター：ドラ〇ンクエ〇ト５の主人公の子どもの女の子

名前：イリアス・ブランシュタイン
年齢：１２才
性別：女性
種族：エルフ
身長：１３５ｃｍ
体重：２８ｋｇ
髪型：腰まで届く長い髪を後ろで括ったポニーテール
髪の色：薄い赤茶色
目の色：緑眼
目つき：鋭い
趣味：紅茶の新しい味種探し

性格：清楚と言う言葉が良く似合う少女。メイド達の中で数少ない礼儀正しい少女なのだが、スペックに少々難があり何をしてもあまり上手くいった試しが無い。失敗を恥じて泣く事もあるのだが、その教訓を役に立てようとして頑張っている。しかし、その考えは否定されるかのように玉砕されていく。
特殊事項：ヤンデレ属性所持者に対する耐性あり。但し、ごく稀にヤンデレ化
ＣＶ：佐久間　レイ
属性：美麗かつドジっ子メイド
想像時類似キャラクター：涼宮ハ〇ヒの憂鬱二次創作「涼〇ハルヒコの憂鬱」のキョン子（清楚で小さいようなＶｅｒ）

名前：アミ・リン
年齢：１１才
性別：女性
種族：人間
身長：１３５ｃｍ
体重：２８ｋｇ
髪型：肩のあたりまでの長さにちょっとしたウェーブが掛かっている。
髪の色：少し暗いこげ茶
目の色：茶色
目つき：丸っこい
趣味：クマやユニコーンなどの人より大きな獣との決闘
性格：中国なまりな言葉を使う少女。実際に彼女の出身は遠い遠い街らしい。明るい性格で、考えなしに突っ込む事も多々ある問題児。しかし、人間としては強すぎる程に格闘戦術に長けていて、大きな大男を一本背負いを百人と組み合っても全然息切れなどは起こさない。その為なのか、戦闘に立つときはいつも最前線に立って斬り込みで突撃を掛けている。勿論それを指示したのはジークでは無い。

自分自身だ。ドワーフ顔負けの腕力を頼りに武器を振り回したりもするが、どうにもリーチの差に追いつけないらしく、いつも武器を使うと攻撃を外している。なので、ナックル等の拳で戦う武器を好んで使っている。
特殊事項：ギャグ戦闘要員。死亡フラグ耐性＋３５
ＣＶ：立野　香菜子
属性：おバカロリっ子格闘少女
想像時類似キャラクター：メ○ティ・ブ○ッドの有間都○

名前：ロミオ・ト―シンス
年齢：１８才
性別：男性
種族：人間
身長：１６３ｃｍ
体重：５７ｋｇ
髪型：切り揃えてあるショートヘアー
髪の色：薄い水色
目の色：群青色
目つき：クリっとしてる
趣味：水澄まし・笹舟作り
性格：少し内向的な少年。しかし、正義感は人一倍強くて堅い物を持っている。河を眺めると心が安らぐらしくいつも水の流れを追っている事がある。しかし、流れを見ているだけではなく読んでいるので色々な物の流れを読むことが出来る。風の流れ。人の流れ。動きの流れ。太刀筋の流れ。果ては殺気の流れなどの人の深層心理の流れまで読み取れそうなほどだ。頭もそれなりに賢く、不自由なことなどあまりなかった。しかし、武術の面に関してだけは天性とも言えるほどにダメダメだったのでヴァイスがジークに寄越す羽目になってしまったのだ。だが、心の面は強いのだ。流石は男の子だ。
特殊事項：暗所恐怖症

ＣＶ：松本　梨香
属性：真面目清純ヘタレ男子

名前：ヴィーナス・フラカリウルス・ウル・ディレクナ
年齢：１７才
性別：女性
種族：神
身長：１４１ｃｍ
体重：３６ｋｇ
髪型：背中までスラリと降りたロングヘアー。途中で結んで短いツインテールを作っている。
髪の色：金髪
目の色：灼眼
目つき：少し鋭い方
趣味：タナトスとの触れ合い
性格：活発でおてんばで明るい性格の少女。学校は１５歳の時に大学までの全過程を修了させて卒業しているいわば超天才児。だが、精神面は未発達なせいでよく子供扱いされている。タナトスのことを好きなのだが、タナトスが嫌がっている上で構っているので性質が悪い。子供扱いされても仕方ないレベルだ。しかし、戦闘面はしっかりどころか超一流なので若くして将軍職に就いている。実力主義の大国家のジェネレーションで将軍職になるということは、それだけ強いということだ。エルフの何倍も優れた頭脳は、冷静な戦況の収集が出来ており、少量ならば魔力も有している。妖精ほどではないにしろ、その量は少量と言いつつも何十もの召喚獣と契約を交わすことが出来るほどに豊満だ。胸の方は貧相だが・・（ジェネレーション時）
性格：平原で殺されかけた事が原因で、少しばかり怖がりになったヴィーナス。しかし、他はあまり変化が見られないので大して考え込むようなこともない。ただ、以前にも増してタナトスへの愛情と

も構ってオーラとも呼べる物は大きくなっている。強いて言うならば、以前と比べて笑顔が多くなった事くらいしか変化は無いかもしれない。（仲間参入後）
特殊事項：活発すぎて体を痛めることも稀にあり。
ＣＶ：釘宮　理恵
属性：おてんば天才ロリッ子少女。（多少のツンデレ要素あり。但しデレ期が長い！）

名前：タナトス・リ・デリウル・パロ・ウル・デス
年齢：２６才
性別：男性
種族：神
身長：１９６ｃｍ
体重：８９ｋｇ
髪型：修行のため為に放っておいた結果のロングヘアーを結んで侍ヘアー（女の子で言えばとても長いポニーテール）分からないなら○クロスＦのア○トを思い出せ。御姫様じゃないけど。
髪の色：黒髪
目の色：黒眼
目つき：鋭い
趣味：猫マニア・ネコと戯れるのが大好き
性格：いつもダルそうにしている青年。だからと言って戦闘でもダルそうにしているわけではない。ただ、何に対しても余裕を持ちすぎている青年なのだ。自宅の屋敷では、計１２匹の猫を飼っていてタナトス自身もその猫たちを溺愛している。そんな一場面だけ見ていれば可愛い物好きな大男とだけ思うのだが、戦場で見せる余裕の態度から、一時期は「死神（タナトス）の大鎌」と呼ばれていた時期もあった。だが、その頃はまだタナトスが１６歳のころだ。本人には覚えがあまりないらしい。と言うか、タナトスは記憶喪失だ。２０歳より前の記憶が抜け落ちているらしい。気づけば軍で将軍職に就いていた。

それだけしか最初のタナトスには理解できなかった。
特殊事項：召喚獣もネコ科のものが多い。（似ているのははライオン・チーター・黒猫・トラの計４体。しかし、まるで仕組まれていたかのように、平原でのあの出来事以来契約が切れている。）
ＣＶ：中井　和哉
属性：ダルデレ記憶喪失青年

名前：ジュリエット・レヴァロニス
年齢：１７才
性別：女性
種族：人間
身長：１４８ｃｍ
体重：４０ｋｇ
髪型：腰に届くまで伸びたロングヘアー。しかし、所々に少しだけ短い部分が存在している。これもおしゃれなのだろうか。
髪の色：薄い紅色
目の色：灼眼
目つき：ボーっとした感じの目。いつも半開き状態。
趣味：特に無し。ボーっとしている事が多い。
性格：いつもボーっとしていて、ロミオを兄のように慕って懐いているロミオの元彼女。ほとんどの記憶を失った事によって、人間関係どころか常識にまで欠けている部分がある為、ロミオが傍に居ないと直ぐに何処かへ行ってしまう羽目になる。興味を示す事があまり無いが、嬉しい事は嬉しい。悲しい事は悲しいと思う程度には理解があるのがせめてもの救いだった。
特殊事項：記憶喪失。
ＣＶ：
属性：記憶喪失呆けて少女

第１０説＋断説　メンタリウル大図書館（後書き）

この大図書館は無限の図書館
新しく思いついた情報は直ぐに書き足されていく。
そんな場所。

次回　第１１説　暮らし

第１１説　暮らし（前書き）

メイド達を連れて自分の屋敷へと帰ってきたジーク
帰り道で少し買い物をして荷物が手いっぱいになりながらも
何とか無事にたどり着いたジーク達

ＬＡＧＮＮＡＬＯＫ　再始動

第１１説　暮らし

苦しくなりながらも荷物を持っていたイグニスは、半分以上を隣を歩いていたジークに渡して一息ついていた。しかし、調子が戻っても荷物を受け取ることはせず、余裕の表情をジークに向けていた。

「ウラヌス・・・は無理か・・ミリア・・って！空飛ぶな！目立つ！」

誰か手伝ってくれそうな人物を探し求めていたジークだが、ウラヌスは非力でこの量を持てるとは思えない。ミリアは、自分のいつも持っている箒で空を悠々と浮かんでいた。速度は皆の歩幅に併せているらしい。しかし、普通は空を飛ぶ者などはいないので必然的に目立っていた。

「良いじゃないの！ご主人にも迷惑な話じゃないでしょ？ほら。」

ミリアは、ジークの真上を飛んでいた。その為ジークはミリアを直視出来なかった。彼女は今は魔女服姿。と言うことはほとんどワンピースの様なものなのだ。後は・・お解りだろう。それを知っていてわざとジークに、見せびらかすように見せたミリア。羞恥心と言うものが無いのか。彼女は。

「・・・お兄ちゃん・・・・・着いた・・」

チェリスが恥ずかしそうにジークの服を引っぱってそう告げた。ジークからすればもう既に見えていたのだから今更とも思ったが、それをそのまま口にするのは無粋だ。なので、ジークは「そうだね」とだけ返した。それが一番最良だったのかもしれない。

「誰か・・門のカギを・・」

そう言ったジークだったが、何故かイグニスが鍵を持っていた。ど

うやら合鍵を渡されていたらしい。それを差し込んだイグニスがカギを４５度捻った。すると、ジークが前回見たのと同じように扉がひとりでに開いて通れるようになった。

「ただいま～～。」

館の正門を開き、皆で一緒に帰ってきたジークは一番に荷物を降ろして数人で分担して運ぶよう指示した。はじめからこうしておけば良かったのだ。しかし、メイド達が可哀そうに思えたジークは我慢して自分で荷物を持つことを選んでいた。ヴァイスからの報告が確かなら、傷が浅かったアダムとイヴは先に帰って部屋の掃除をしているらしい。それがかなり的確、かつ俊敏なのだろう。ミリアの猫であるオルトロスに踏みつぶされていたガラスの床などが元に戻っていた。流石はメイド長と執事長だ。

「・・・あっ！お帰りなさい！兄上」

たまたま玄関前の廊下を通りかかったアダムが、ジークを優しく迎え入れた。因みに、アダムがジークの呼び方を「兄上」にしているのは、大の大人がこの年になって「お兄ちゃん」は恥ずかしいと思ったからだ。

「ただいま！・・・アダム。この子の事だが・・・」

ミリアを指したジークは、何かを聞こうとしたがアダムは分かり切ったように「ヴァイスさんから聞きました。ＯＫです。」とだけ答えた。

「やったぁ！これで正式採用なのね！」

飛んで喜んだミリアは、チェリスの手をとって一緒に踊り始めた。チェリスの方はかなり苦しそうになっていたが、ミリアはそんなことには構いもせずにただただ子供のように喜んでいた。

「・・・あっ！アダム君！時計見て！懐中時計持ってるでしょ？」何かを思い出したように声を上げたウラヌスが、アダムに時間を聞いた。直ぐに確認したアダムは「午前８時４５分ですね・・」とだけ呟いた。すると、ウラヌスが「ヤバい！また今度ね！」とだけ言って帰って行った。どうやら約束があるのだろう。とジークは思った。

「ミリア。君も今から我々と同じく、この兄上の使用人だ。宜しく頼む。」

アダムのその表情は、憎しみなど微塵も感じさせない明るい笑顔だった。どうやらヴァイスに説得されてミリアを認める気になったようだ。ヴァイスには度重ねて感謝しなければいけない。色々と助けてもらったのだから。

「イヴ！・・・・「はーい！」ミリアを更衣室へ連れて行ってくれ。」

イブに指示を出したアダムは、ミリアにイヴのいる方向を教えて向かわせた。本当にアダムの指揮能力には驚かされる。そのカリスマ性は一流で、あのミリアも正直に言うことを聞いている。どうやら本当に此処の襲撃は故意に起こしたものでは無いらしいとジークは改めて考えた。しかし、その説明では幾つか引っかかる点が存在した。先ず、使い間や召喚獣と言うものはプライドが高く契約者以外の者の命令を聞く事は滅多にないらしい。だとすれば何故、オルトロスは此処を２度も襲撃したのか。第２に、一度目の襲撃が起こったのはジークがまだ初等科の時の出来事だ。ならばミリアもまだ幼いはずだ。だとすればミリアにオルトロスが操れるとも、ましてや召喚すること自体出来なかったと推測できた。ならば、一度目の襲撃はミリア以外の誰かが、オルトロスを使って襲わせたと考えられた。次に、今の状況をこちらの国の上層部が見逃すとは考えづらい。その内にでも監査に来るだろう。そうなればミリアは裁判にかけら

れることになる。他にも色々と思いついていたが、処理しきれなくなってきたジークは深呼吸をして気を落ち着けて後ろを振り返った。そこには6人程の少女達が列を作って並んでいた。

「・・・お兄ちゃん！皆が自己紹介したいって。」
唐突にイグニスが口を開いた。どうやら、昨夜の内に予定してはいたらしい。なのだからこのようなセリフが言えたのだろう。その言葉を聞いて一列に並びなおしたメイド達を見たジークは確信した。

「先ずは私から！ファリス・ゴルト・ターシス！種族は妖精。力は七曜の金です。」
元気よく挨拶したファリスは、喜びながらジークの隣に立った。そして、その仕草を見たジークはある事を思い出した。そう言えば昨夜のパーティーで真っ先に料理を持ってきたのはこの子だった。

「つ・・・次は私？・・・・え・・えっと・・クルス・エイリス・・ドワーフ・・です・・」
緊張しているのか、それとも心が開けていないのかクルスは言葉もとぎれとぎれな状態で紹介を済ませてファリスの隣に立った。どうやらチェリス以上の恥ずかしがり屋らしい。

「次は僕だね！待ってたよ！・・・イリア・リーチェです！これから宜しくね！お兄ちゃん！」
一人称は僕なのだが、確実に女の子だった。所謂「僕っ子」である。しかし、そう言う所が好きな将校も居て、わざわざ使用人に僕っ子口調を強制させるらしい。どう考えても変態だ。

「私の番？・・・ニンフ・チャイル。妖精よ。力は七曜の水。分かったわね？」
なんとも強気な性格。それがジークが貼り付けたニンフの第一印象

だった。それもあながち間違いではないかもしれない。ニンフの口調には、何か強気の空回りの様なものが見え隠れしていた。

「私の番ですわね？・・・イリアス・ブランシュタインでございます。エルフです。」

懇切丁寧に説明したイリアスは、姿勢を崩さないまま皆の所に並んだ。どうやら幼いながらもそれなりに教養はあるらしい。

「最後はアタシ？・・・アミ・リンですネ。どうぞ宜しくネ。」

なんとも偏った中国なまりで挨拶をしたリンは、ニコリと笑って最後に列に入った。どうやらこれで全員の自己紹介が終わったらしい。やっと終わったと思い、自分の部屋に戻ろうとしたジークだったのだが、廊下から一人の少女が姿を現してジークは足を止めた。

「・・・どうかにゃ・・・ご主人様。」

その女性は、メイド服を着てはいるものの間違いなくミリアだった。しかも、何故かイメージと割にあっている猫耳をカチューシャの代わりにつけていた。しかもそれが桁違いに似合う。どうやらミリア自身も気に入っているようで、ジークが好反応を示したことに喜んでいる。すると、後ろからイヴが何かを運んでやってきた。見るとそれは１５人分は入るであろう衣装ケースだった。

「皆ぁ！お兄ちゃんにこれを着せましょー？」

イヴが衣装ケースを開くと、中にはメイド服やセーラー服、無意味にゴスロリ服、嫌味に水着、遊び心をくすぐるようなデザインの学生服、誰が着ているのか直ぐに分かるデザインの巫女服、シンプルにジャージ上下、動物のコスプレ用衣装、とどめにボンテージまで用意されていた。

「・・皆？お兄ちゃんに何するんだ？お兄ちゃんは疲れ・・キャー

！」
女の子っぽく悲鳴を上げたジークは、メイド達の思うがままにされて行った。その間、突っ込み役である筈のアダムは、調理室にいって料理を作っていた。どうやらそれなりに興味を示していたようだが、そのあたりは無駄に子供っぽい。どうせならアダムにもやってもらいたかったと心の奥底から悲願するジークの姿がそこにはあった。

「こんな感じですにゃ！・・・・ジュルリ・・」
無理矢理着替えさせられたジーク（着ている服は御想像のままにお願いします。）を凝視したミリアは、まるで獲物を追い詰めた猫のように舌舐めずりをしていた。これではどちらが主人か分かった物ではない。そんなこんなでその日一日は楽しく流れて行った。

第１１説　暮らし（後書き）

メイド達が庭や館内で正式に仕事を開始しだした今日この頃
唐突にジークフリート邸を訪れた一人の少年が居た。
その少年はジークへある書状を渡しに此処へ来たというのだが・・・

次回　第１２説　弟子　乞うご期待　　とは言わないものの、心安らかに待っていて下さい。

第１２説　弟子（前書き）

マスコミで騒がれた「ジークフリート邸襲撃事件」から
早くも１週間が経っていた。
環境に素早く慣れていたミリアは、イヴから任された玄関先の仕事
をこなしていた
そんなミリアの前に、一人の少年が現れた。

第12説　弟子

晴れ晴れとした青空の中、ミリアは鼻歌を歌いながら箒を使って地面を掃いていた。どうやら今日は太陽が恥ずかしがることは有り得なさそうだった。周りには雲の欠片の一つも見当たらなかったのだ。これでは楽しく捗っている掃除も段々と滞って来る。

「うにゃあぁ・・・熱ぅぃ・・」

さっきまで楽しそうに掃除を進行していたミリアだったが、この暑さに負けてへばって箒に凭れかかるようにして崩れてしまった。しかし、床は通常の何倍も熱く感じた。これでは空気の熱に晒された方がまだマシである。

「うにゃあ！！・・熱いぃぃ！！・・・こんなので・・・私、やってけるのかな・・」

苦し紛れにため息をつきながら仕事に戻ろうとしたミリアだったが、外を掃除していたのが幸いしたのか、正門の前に一人の少年が立っていた。どうやらこの屋敷に用があるようなのだが、先程から辺りをキョロキョロするだけで入ろうともベルを押そうともしていなかった。これでは不審者と間違えられるのがオチだと心から思ったミリアだったが、先週程前の自分の姿を思い出して落胆した。

「・・・入りたいの？」

気分転換に良いかもしれないと思ったミリアが少年に声を掛けると、少年は「ハイ・・」とだけ答えた。無口なのか、それとも緊張しているのか知らないが、とにかく不思議な少年だとミリアは思った。

「・・・ジー・・っと！ご主人様！お客人を連れてきたにゃ！」

一瞬いつもの調子でジークと呼びそうになったミリアだったが、イ

ヴから「客人や人前等ではお兄ちゃん・・即ち、ご主人様を名前で呼んではいけません！」と言われていたのを思い出して適切な呼び方に言いなおした。すると、タイミング良く階段を降りようとしていたジークがこちらに気がついた。

「・・・・どうしたんだ？」

階段を降りてきたジークは、ミリアに耳打ちしたがミリアはリラックスした顔つきになっていた。それを見たジークは「・・こいつ、涼みに来ただけか・・」と、大体当たりの推測論を考えていた。

「・・ジークさんでよろしいですね？僕、ヴァイス先生の生徒で〔ロミオ・トーシンス〕と言います・・・・突然で申し訳ないのですが・・僕を弟子にしていただけないでしょうか・・・」

本当に突然の話だった。いきなり訪ねて来たかと思えば自分の教師の名前を出し、いきなり話をしだしたかと思えば弟子にして欲しい。本来なら図々しいにも程がある。それは、そんな状況下にならなければ理解出来ないでしょうが、ジークは理解するのが早かった。何故なら、ロミオはヴァイスが書いたであろう手紙を彼に渡していたのだ。それを受け取ったジークは、それを広げて内容を読み始めた。

「・・・・要約すると、君はヴァイスの生徒と言うのは本当の事で、そのヴァイスがこの子を鍛えたいと言うことで俺の下に送らせた・・・と、言う訳だな。ほら、契約金らしき札束も入ってる。」

封筒の中から札束を取りだしたジークは、それを扇子のようにパタパタさせた。いやらしそうに見えるかもしれないが、この状況ではどうもしようがなかった。

「仕方ない・・・あいつには皆の貸しがあるからな・・分かった。俺の弟子入りを許可しよう。」

本当は弟子など持ったことも無かったジークが、今は一人の弟子を

持つ師匠になっていた。このときのジークの心の満足感は物凄いものだったが、そんな自分を考えて一気にその満足感が音を立てて崩れ落ちた。その勢いと言ったら、さながら雷に直接命中するようなものだ。

「?!?!ありがとうございます!早速引越しの準備しなきゃ・・」その言葉を聞いたジークは驚きのあまりにロミオの早まる足を止めてしまった。何の前触れも無く引越しの話題になってしまっていたのだ。どうやらこのロミオは、相当と言っていい程に集中力が欠如しているらしい。これではジークの所に弟子入りに来た理由も分からなくもない。落ち着きが無いのだ。この少年は。とにかく、ロミオを留めたジークは口早に色々なことをロミオに聞いた。引越しの事、家族の断りの事、その他諸々。

「ええっと・・・家族の事なら心配いりません。僕、一人暮らしですから。だから、こんな広い屋敷に住めると思うと嬉しくて。それに、引っ越しと言ってもこれだけです。」
そう言ってロミオは、肩から下げていたかばんを床に置いた。これが全財産だと言ったら驚くしかないとジークが思っていたが、その直後に、ロミオからの緊急通知「これが全財産です。」

「えっ・・・え〈えええええっ!〉・・・」
勢いよく驚こうと思ったジークだったのだが、それよりも先にミリアが絶句したように驚愕の声を上げていた。二人とも失礼だと思うかもしれないが、実際にそうなのだから仕方がない。とにかく、その驚き方が受けたのか、ロミオは思わず笑い出してしまった。その表情はまるで子どもそのものだ。表情の何処にも哀しみの表情が見えない。学生だから当然かもしれないが、学院では稀に能力を買われて兵士にいち早くなる学生もいるのだ。だが、戦場から戻ってくると生徒に戻してもらえるのだが、どの生徒も大概は目つきが人殺

しの目つきに変わってしまう。それをジークは何度も見てきた。ジークが学生だった頃に出天命令「昔の俗に言う赤紙」を渡されて戦場に赴いた生徒はジークのクラスだけで１４人。その内の９人が無事に戻ってきた。残りは死んだということだ。更にその内の８人は死人の様な、はたまた殺人者の目をしていた。唯一何も無く帰ってきたのは、今も明るく生徒の面倒を見ているであろうヴァイスだった。その次の卒業間近の年に、ジークも戦場に駆り出された。その結果、何とか死人からの恐怖に打ち勝ったジークは学院に帰ってきた。しかし、その頃には既に幾つかの誰も座っていない席が存在していた。そこにはかつてはジークとも仲が良かったであろう生徒が座っていたのだ。しかし、今は全員土の下だ。

「・・・くっ！嫌なこと思い出しちまった・・改めて、ジークだ。宜「ミリアだにゃ！」・・・」

嫌な思い出を振り返っていたジークは、それを何とか心の奥に仕舞い込んで目の前のロミオに目を向けて挨拶をした。しかし、終わりのあたりでミリアが横入りして来て挨拶の途中で黙り込んでしまった。

「まあ・・・とにかく、宜しくお願いします。」

少し頼りなさそうにジークの手を取って握手したロミオは、晴れてジークの弟子になった。

第１２説　弟子（後書き）

ロミオが弟子入りして早３日
全然進まない修練の最中
ジークに一通の手紙が送られてくる。
その内容を見たジークは怒りに燃えた。その内容と如何に。

次回　第１２説　出陣命令　　番外編　ウラヌスの日常
同時編集予定

第１３説　出陣命令　番外編　ウラヌスの日常（前書き）

ロミオの修行の日々を続けて早３日
上達の兆しすら見えないロミオに、ジークは少々苛立っていた。
そんな中、兵士が使いでやってきてジークに一通の手紙を渡す。
その内容は、ジークの怒りを買うことになる。
一方、ウラヌスは自分の屋敷で大人しくしていた。

ＬＡＧＮＮＡＬＯＫ　開始

第１３説　出陣命令　番外編　ウラヌスの日常

小鳥の鳴き声が聞こえてくる頃、日の光を浴びてロミオは目を覚ました。ジークに分配してもらった自室のベッドの上で目を覚ました。しかし、直ぐには起き上がらずに物思いに耽っていた。

「ジュリエット・・・無事でいてくれよ・・・」

右手を無意味に天井に向かって伸ばしてそう呟いたロミオだが、握り拳を作ると同時にベッドから起き上がって着替えを始めた。その頃、ジーク達はリビングルームで一斉に食事を取っていた。本来なら使用人が主人と一緒に食事を取ることは業務上有り得ないらしいのだが、ここでは少し違っていて皆が楽しくお喋りしながら食事をしたいと言うジークの計らいで皆が一緒になっているのだ。

「・・でね。私たちの中でも力をつけなくちゃと思って、皆で一緒に稽古付けて貰いたいなぁと思って・・・ダメかな・・」

語りを絶やすことなく喋り続けていたイグニスだったが、急に稽古を付けてほしいと言いだしてやっとマシンガントークに終わりが来た。勿論、ジークがそんなことを許すわけが無かった。事もあろうに子供が戦場に出て学生時代のあの目になることは自分の身を呈してでも避けたかった。しかし、きっと断った所で誰も諦めたりはしないだろう。行動だけ見ていれば戦闘狂の仲間入りを目指しているようにも見えるが、この子たちはきっと純粋にジークの役に立ちたいのだろう。それが分かっているジークだったが、断ろうにもどのように説明すればいいのか分からなかった。下手に説明すれば誤解の海を築き上げかねない。しかも、メイド達は皆が一様にジークに願いの眼差しをぶつけている。これでは断るに断れない。「う～ん・・」とだけ唸って悩んでいたジークだが、唐突に一枚の紙をアダムから渡された。

「兄上。この人数がいれば屋敷の担当を割り振ることが出来るようになりました。なのでそれぞれの役割配置の方の指示を2日以内にお願いします。」
それだけ言うと、アダムは何処から取り出したのか分からない懐中時計を確認してその場を去った。少しばかりは話をしてもいいのだがと思ったジークだったが、その前にメイド達の視線があった。仕方なく思ったジークは、簡単な役割だけ決めようとペンを握った。しかし、門に備え付けた呼び出しベルが鳴ったのを聞くとペンを置いて屋敷から出てしまった。かなり不服そうに頬を膨らましたり、無意味に床を蹴ったりしていたメイド達は、仕方なく食事の後片付けを始めた。そして、ジークが門を開くとそこには一人の少年が立っていた。学院で指定されている制服を着ている所を見るとどうやら使いで来た生徒のようだった。この所は学院の制服を良く見かけていたので良く分かった。

「王室からこのようなものを預かって参りました。どうぞ、お受取りを・・」
そう言って少年は制服の裏ポケットから一通の書状を取りだした。その書状には確かに王室の目印である焼き印が付けられていた。それを受け取ったジークは、その封を破る前に少年に帰るよう言って少年を帰らせた。そして、帰るのを見送った後に封を破って中身の書状を取りだした。

「これは・・・『ジークフリート殿、貴方の力を貸して頂きたくこの書状をお送りした次第です。この度は、苦戦を強いられている国境の町である風吹く谷へと赴き敵兵を一掃していただきたいのです。この戦いでは、人員不足が発生してしまったために貴方に軍の兵士を分け与えることが困難になっています。この状態で辛いとは思いますが、自力で兵力を集めて戦地へ赴いてください。　第15代

国王　アリス王女』・・・ふざけるなっ！」
自然と音読してしまったジークは、書状の内容を見て怒りに燃えた。これでは無駄死にして来いと言っているようなものだ。多分憶測の域を出ないのだが、兵力だって有り余っているはずだ。こんなことでは出陣した所で自分一人か寄せ集めの軍隊になってしまう。そんな状態で勝利できるかと聞かれれば必ず答えは出来るわけがないの一言だろう。しかし、その書状の裏にはもう一通の手紙があった。それを読んだジークには、本格的にアリスの心境が分からなくなっていた。

『こちらの文書は私個人の物です。仕事に支障が出るようでしたら即刻燃やしてください。最近、貴方の事を考えると何故か頭が痛くなってしまいます。このままでは貴方と出会うたびに私の脳には傷が増えて行きそうなのです。この気持ちを、私はどのようにして受け止めれば良いのでしょうか。急な事なのは分かっています。このような命令は、貴方の様な強力な方だから出来ると思っております。故に貴方にしか文書をお送りしておりません。私からのお願いです。どうか素敵に舞って帰還してください。』

「・・・なんだ？まるで恋文じゃないか・・・まさか、アリスちゃんが俺みたいな将軍職の男の事を好きだなんてことは・・・《あはは、こいつは面白い。自分の事も分からなくなったのかい？》！誰だ！」
恋文にも似た文書を読み終えたジークだったが、唐突に頭の中に声が響いた。その声は高さ的に女性の物だろう。しかし、ジークに声の心当たりは無かった。すると、唐突に聞こえた声は唐突に消えた。
「・・・・なんだったんだ？今の・・それより、これを皆に・・皆・・」
ジークが考えに耽るより先に屋敷に戻ろうと後ろを振り返った。す

ると、そこにはメイド達が肩を並べてジークを睨みつけていた。仕方がないだろう。この様子だと彼女たちはジークが手紙を読み始めた頃から立っていたのだろうから。

『お兄ちゃん・・・・私達も行く！』

一斉に声を揃えて言ったメイド達だが、ジークが許すわけがないと分かり切っていた。すると、案の定ジークが「ダメだ！」と声を上げたが、唐突にチェリスが色々な武器を取りだしたのを見ると、彼女達がどれほどまでしてジークを助けてやりたいのかが伝わってきた。きっとジークが死体で帰って来た日には皆が肩を並べて自分の腹を斬るだろう。それほどまで、皆はジークが好きなのだ。

「・・・・・よし！それなら、皆に一つだけお兄ちゃんと約束してくれ！」

そう言ってジークは皆と視線が同じになるようにしゃがみ込んだ。良く見ればクルスやイリア等は涙が目じりに浮かんでいた。怖いのだろう。しかし、怒らなかったジークに安心したのか皆の目には闘志が宿っていた。宿らない方が安全なのだが。

「簡単な事さ！ただ一つ・・・死ぬな！これだけは守ってくれ！」

そう言って皆の頭を撫でて回った。すると、皆の心に一つの団結が生まれた。『死ぬな！』この事を彼女たちは後にこう呼ぶこととなる。『誠実（ギアス）』と。

一方その頃、ウラヌスは自分の屋敷でぐったりしていた。別に風邪をこじらせているわけではない。妹や使用人たちから外出禁止状態にされているのだ。

「なんでみんな私に冷たいのぉ？・・・・・はぁ、早く会いたいよ・・・ジーク・・」

天井に向かってジークに気持ちを伝えたい一心になっていたウラヌスだが、そこに誰かが扉を開いてやってきた。それに驚いたウラヌスは慌てて寝転がる体制から起きあがった。見るとそれはウラヌスの妹のリリスだった。まだまだ１２才と幼いながらもこの屋敷の次期当主だ。そして、姉の何倍もませているかなりの精神の持ち主。

「おねぇちゃん・・・・ここから出してあげようか？」
その言葉に驚いたウラヌスは、思わず飛び上がった。そして、恥ずかしそうに自分の頭を掻いているリリスを改めて見つめることにした。別段何かを企んでいるようにも見えないが、なにか裏がありそうな気がしていたウラヌスは警戒を強めた。すると、それを裏付ける発言をリリスが口にした。

「出してあげるから・・今度こそジークさんの子どもを貰ってきなよ？この幸せ者！」
その言葉を聞いたウラヌスは、顔を真っ赤に染めてしまった。このままだと、やかんを置いただけで湯が湧きそうだ。そして、動揺しか頭の中に入らなくなったウラヌスは、必死に抵抗の意思を伝えようとするが、呂律が回らずに言葉を聞き取ることが出来なかった。その様子を見たリリスは、腹を抱えて笑っていたが、下から使用人に呼ばれてあっさりと顔を元に戻して部屋を去っていった。

「全く・・・リリスったら・・・ジークがそこまで大胆・・・だったら嬉しいかな・・・」
そんなことを考えながら一日は更けていった。そんな時、ウラヌスに一筋の光が見えた。見ると、そこには人一人がやっと通れるくらいの穴が開いていた。その傍にはリリスの愛用しているドリルが置いてあった。そして、リリスに感謝しながらウラヌスはジークの下に駆けて行った。

第１３説　出陣命令　番外編　ウラヌスの日常（後書き）

出陣命令が出た次の日、全員で武装して戦地に赴いたジーク達は殺伐とした平地で敵軍と出会うこととなる。
その中には、ロミオの視線を一人占めにした少女がいた。
戦地でロミオが見た少女とは一体。
そして、ジークにはライバルが登場する。

次回、ＬＡＧＮＮＡＬＯＫ　第１４説　対立　お楽しみに

第１４説　対立（前書き）

アリスからの突然の出陣命令を受けたジークは
戦闘に備えて皆を一晩休ませた。その間に自分も休んだジークだが
朝になると変化が訪れていた。
そして、戦地の近くの平原に敵陣と鉢合わせてしまったジーク達は
応戦をする。
その中に一人、ロミオの視線を放させなかった一人の少女の姿があ
った。
そして、ジークはライバルの登場を快く思っていなかった。
ウラヌスにもライバルは生まれ、その態度にウラヌスは激怒する。

第１４説　対立　始動

第１４説　対立

書状が届いた次の日の朝方。ジークは体に違和感を感じて目を覚ました。見ると、誰かの手がジークを抱くように回されていた。最初はミリアだと思ったジークだが、寝息で聞こえた声に驚愕した。

「・・・えっ？ウラヌス？何時の間に？」

そこで寝ていたのは、可愛い寝顔を見せつけるかのようにジークのすぐ傍で眠っていたウラヌスだった。その時、ウラヌスが少し動いた。この調子で行けば直ぐに起きてしまう。しかし、この状況をウラヌスが見てしまえばきっとジークはウラヌスに襲われることになる。それを避けたかったジークはとっさに後ろを向いて寝た振りを決め込んだ。

「・・うぅん・・・・ジークぅ・・・好きだよぅ・・ムニャムニャ・・・」

一瞬、告白されたような錯覚に陥ったジークだが、ウラヌスが続きを言わなかったことが幸いしてジークの理性は保たれた。そしてウラヌスを好きだと言う気持ちに駆られたジークだが、直ぐにあの頃の記憶が蘇ってしまった。そして、反射的にウラヌスから視線を外したジークは記憶が紛れるまで体を震わせていた。

「・・・失礼します。兄上、そろそろ用意の方を・・・あっ・・・えっと・・その・・・・ごゆっくり！」

唐突にジークの寝室に入ってきたアダムは、ジークのベットの上の惨状を見て驚愕の念を呑みこんで我慢した挙句、押しつぶされたアダムは言いかけたことを破棄して部屋を飛び出した。確実に誤解を招くこととなるだろう事は必至だった。しかもタイミングのいいことにウラヌスが目を覚ました。

「・・あれ？ジーク？おはよ・・・なんだか今日は朝から冷えるね・・」
まるで何も知らないかのような感じに起きたウラヌスは、上半身を起したがジークの視線にはウラヌスの白い肌の背中がまるまる見えていた。と言うことは、ウラヌスは現在上半身は全裸と言うことになる。そんなことになるような事をした記憶が、ジークには全くなかった。幸いにも前面にはシーツが掛かっていて隠れていたが、徐々にずれ落ちてきていた。

「・・・どしたの？・・・・！？きゃっ！」
寝ぼけた声で口を開いたウラヌスだったが、シーツの存在と自分の状態を把握するとシーツをガシリと引っ掴んで前面を隠した。ウラヌスの顔は紅潮しきっている。そのウラヌスはというと、頭の中で妹に言われた言葉を延々と繰り返していた。『・・・ジークさんの子供を貰ってきてよ。この幸せ者！』

「あの・・・ジーク？私に・・その・・・Hな事・・・したの？」
顔を赤らめたままの状態でジークを問い詰めたウラヌスだが、否定したいのも山々だが記憶が無いので否定しきれない心境のジークがそこにはいた。なんとも情けない姿だが、ジークなどの鈍感な奴には丁度良い刺激になるのだ。

「わわわ！とりあえず服着ろ！服！」
慌ててそこらへんに散らばっていた服を拾ったジークは、これまた素早くウラヌスに渡して自分の寝室を飛び出した。自分の寝室を慌てて飛び出すと言うのもかなり変な話だ。しかも、真実には誤解があったのだ。実際はこうだ。

「じーくぅ・・・どこー・・・？」

自分の屋敷から脱走したウラヌスは、ジークの屋敷内をウロウロしていた。すると、何かを閃いたかのように一直線にジークの寝室に侵入した。そこには案の定ジークが眠っていた。それをチャンスに思ったウラヌスは、熱かったのかいきなり自ら服を脱いで上半身が素っ裸になった状態でジークの布団に入りこんだ。そうなると安心しきったウラヌスはあっさりと、かつぐっすりと眠ってしまった。そこから先は特にこれと言ってやましい事も起こらずに時間だけが過ぎて行った。

「・・・とりあえず、服着たよ？こっち向いて？」
ウラヌスに呼ばれて振り向いたジークは漸くと言っていい安心感に包まれた。そこにはきちんと私服を着たウラヌスがいた。何故安心したかにはもう一つ理由がある。つい先日の事だ。ジークが目を覚ますと、隣ではウラヌスと同じようにミリアが隣で眠っていた。しかも、ウラヌスと同じく起きれば裸が判明していた。流石にアダムが来る事まで一緒ではなかったが、ミリアの場合は服を着るように注意したが着ていた服が殆ど局部の見えかかっている下着姿だった。その点を考えればウラヌスの方がマシだ。

「よかった・・・っと！今日はそんなことしてる場合じゃ無かった。」
一安心したジークだが、今日の大事な事を忘れかけていた。今日はこの国の命運を左右するかもしれない戦闘の出発の日。そして、メイドの皆の初陣となっている。きっと屋敷の外では、メイド達が恐怖に打ち勝とうと体を震わせている事だろう。しかし、一つ問題があった。このままではウラヌスも連れて行くことになってしまう。何とかして帰したかったが、そう言う訳にはどうも行きそうも無いようにウラヌスがジークを見つめていた。しかし、ここは心を鬼にしてウラヌスを帰すように言うことにした。

「ウラヌス・・これから出かけるからちょっとの間帰っててくれないか？」
すると、ウラヌスは何かを感づいているのかニヤリと笑って「はぁい！」とだけ言って服を整えると帰って行った。なんだかあっさり過ぎると思ったジークだが、とりあえずは自室に備え付けてあったゼロブレイカーを引っぱりだして玄関に出た。

「・・あっ！お兄ちゃん！」
イヴが声に出してジークを呼ぶと、メイド達もつられるようにしてジークを呼んだ。これから先は死ぬかもしれない戦場に赴くと言うのに、これも恐怖心に打ち勝った証なのだろうか。

「・・よし、これより！我らが小隊「アルテマ小隊」は、国境の町である風吹く谷へと赴き、そこで暴挙を働くジェネレーション兵士軍を一気に叩く！そして、風吹く谷を救出する！最後に確認だ！この中に戦場に行きたくないものは手を挙げろ！」
ジークが演説にも似たような説明をメイド達に教え、最後に戦場に行かせないものを選別しようとした。しかし、ジークの考えは間違っていた。皆が手をあげずにジークをただただ見つめていた。その心は一つしかなかった。そう、「お兄ちゃんを守って見せる」という堅い結束が。

「皆・・よし、出陣だ！門を開けてくれ。」
そう言って門の前にジークは立った。すると、イグニスがカギを取りだして門を開けた。そこには先程から見えていたが数台の馬車が並んでいた。これに乗って戦場まで駆けるのだ。

「皆！乗ってくれ！」
そう言ってジークが指揮するまでも無く、メイド達はそれぞれに乗り込んでいた。どうやら馬車に乗るのは初めてである者も多いらし

い。これでは遠足に行くような気分だ。

馬車が走り始めて暫く経つと、何やら別の馬の足音が聞こえてきた。もしやの敵兵かと思ったジークだったが、その予想は見事に外れていた。その馬車の上には、鎧を纏って背中に長い両刃剣を背負ったウラヌスだった。すると、ウラヌスはジークが馬車の扉を開けて覗いていたのを見るや否や馬の速度を上げて一気に扉の前までくると、馬から馬車に飛び移った。

「ジーーーーークぅ！」

着地に失敗しそうになったウラヌスだったが、ナイスタイミングでジークがウラヌスを抱きとめた。そして、そのまま馬車の中に突き飛ばされた。しかも空気を読むかのように勝手に扉が閉まって馬車の中にはジークとウラヌスの二人だけになっていた。非常に気まずい。このままではマズイ。そう思ったジークだが、ウラヌスは特に何かをするでもなくジークから離れて一言「ゴメン・・」とだけ謝った。

「ごめんね・・・勝手についてきたりして・・・」

急にしおらしくなったウラヌスだが、謝るしか今の彼女には出来ないでいた。すると、それを見かねたジークがウラヌスを抱きしめた。本来なら、ウラヌスの顔を見るとトラウマが蘇って接しにくくなるが、今回は目を閉じているのでなんら問題は無かった。

「・・そんな事無い。そんな事無いからな。」

ジークが慰めてやると、気持ちが一転したかのように明るくなったウラヌスがジークを抱きしめた。傍から見れば抱き合っているような状態だが、その瞬間にはもうジークに呼吸困難が起きていた。抱きしめた場所が悪かった。もろに肋骨を圧迫している上に、ウラヌスの力が思った以上に強くて苦しんだ。

「ンフフ・・・《ガダンッ》・えっ！何？」
ジークの苦しみなど知らずに抱きついていたウラヌスだが、馬車が大きく揺れてやっと手を放した。どうやら誰かが道を聞いているようだ。内容は聞こえないまでも女の子の声が聞こえた。しかし様子が変だった。普通なら人に道を聞かれる事などしないで戦場まで行く予定だったのが、こんな所で止まっていた。暫く怪しげな雰囲気を醸し出していたが、それは唐突に訪れた。何かを切り裂く音と断末魔がすぐ前で響いた。それに反応するように馬車を飛び出したジークとウラヌスは驚いた。そこには、首の無くなった馬車引きの体が転がっていた。

「はぁい。この馬車、高価そうだから・・・貴方達に人質になってもらうわよ？」
ジーク達が視線を上にあげると、そこには先程まで生きていたであろう馬車引きの首を持った少女が剣に付いた血を払い落している所だった。どうやらジーク達の身分を分かっていない所をみると、どうやらこの少女は現在の撃退対象である敵軍の一人らしい。しかし、あちらの国にもよほど兵隊が欲しいらしいと見えた。この少女は、見た目からしてイグニスの幾つか下のように見えた。まだ学校でペンを走らせているような年頃だろう。そんな少女が、ジーク達の目の前で人質になれと言ってきたのだ。

「おいおい、ヴィーナス・・・お前ってやつはなんでそうまで自分勝手なんだ。」
ジークが少女の事ばかり警戒していると、不意に背後から男性の声が聞こえた。まずいと思ってその場を離れようと思ったジークだったが、進行方向になにやら鎌の様なものを突き付けられて止まらざるを得なくなった。どうやらこの男は少女の仲間らしい。

「フフン・・私の手に掛かればこんな馬車の一台や二台、どうってことないの。それよりもタナトス、見てみなさいよ！この持ち主、カップルって奴だわ。」
なんだか威張り散らすように何処にも無い胸を張ったりして自慢していたヴィーナスは、ジーク達を見て素直な意見を主張した。その時、ジーク達の心の中は何故かドキッとしてしまった。

「フフフ、こんなのと巡り合えるなんて、私たちは・・やっぱり愛の絆で結ばれているのよ！そうでしょ？タナトス？」
喜びが頂点に達したのか、ヴィーナスはタナトスに抱きついていた。その時のタナトスの顔はと言うと、どうしようもないくらいに呆れた顔をしていた。どうやらヴィーナスの言う恋とは、単なる片思いらしいとジーク達は温かい目で見守っていた。しかし、此処にチャンスが出来た。タナトスの腕が塞がったことによって鎌が下に降りた。その隙にタナトスの間合いから逃げ出したジーク達は改めてタナトス達を見比べた。ヴィーナスは平均より少し小さめの身長で、平均よりもかなり高めな身長のタナトスに抱きついていた。これではまるで親子だ。

「どうかしましたか？師匠・・！敵兵！」
ジーク達が鎌の間合いから抜け出たその時、停止した馬車を不審に思ったロミオ達が出てきた。その時にはもう、ロミオ達を乗せていた方の馬車引きは逃げ出していた。すると、流石に数で劣っていると認識したヴィーナスが指を鳴らした。すると、足元に大量の召喚陣が形成されてあっという間に何十もの召喚獣が姿を現した。

「あらら・・あんた達、貴族じゃなくて軍だったの・・道理でタナトスの鎌から逃げられた訳だ。」
なんだかつまらなそうに驚いたヴィーナスは、改めて先程までの状況を把握した。そして、タナトスが大きく息を吸い込んで指を銜え

て指で笛を吹いた。すると、後方の崖の上から誰かが大きなライオンの様な獣に乗って崖を跳躍だけで飛び降りた。その誰かを見たロミオは、驚愕で口が閉じられなかった。

「ジュリエット・レヴァロニス。只今参上仕りました。」
その姿を見たロミオは驚愕した。その姿は、ロミオの恋人であり少し前に行方をくらましてしまっていた少女、ジュリエットそのものだった。

「ジュリエット！」
ロミオがジュリエットを呼んだが、本人は「誰だ貴様は！」とだけ言って物凄い形相で威嚇してきた。その時になってようやく、ヴィーナスが突撃命令を下した。そして、一斉に獣たちが襲いかかってきた。

「くそ・・俺達も行くぞ！」
ジークの掛け声で、皆もそれぞれに武器を持って戦場の一ページに進入した。

第１４説　対立（後書き）

今回は、文字カウント数が５０００を超えましたのでこれより先からは番外予告をしようと思います。
「はいはい！進行役のウラヌスです！」
「同じく、進行役のルイズで～す！」
「今回は激戦だよ？」
「激戦だね。」
「そして、」
「そして？」
「次回にはあんな人やこんな人が登場するかも・・」
「おおっ！そいつはそいつは！次回もお楽しみに！」
「でも、次回からはコーナーは無いとか・・」
「ええぇっ！！？」

第１５説　激動（前書き）

風吹く谷に移動していたジーク達だが
途中で敵のヴィーナスとタナトスと言う兵に足止めされた。
そして、ヴィーナスの呼びだした召喚獣達がジークに襲いかかる。

第15説　激動

大地の一部が血で染まった戦場の上で、ジーク達は襲い来る獣たちを迎撃していた。

「でやっ！・・・こいつら、倒してもキリが無いっ！」

剣で獣を叩き伏せていたジークだったが、いくら倒しても次から次へと獣が襲い来ることに少し焦り始めていた。そこにはまだ幼いメイド達も戦っているのだ。こんなことでは彼女たちまで危ない目にあう事になってしまう。それだけは避けたかったジークだったが、既にメイドた達も戦闘に加わって獣たちを切り伏せていた。恐怖で手を止める者が出そうで仕方ないジークだが、皆が皆、ジークの為にと頑張っているのだと分かって力を入れなおした。そこへ獣が腕を振り上げたが、ジークの頭をかすめる寸前に獣は突き飛ばされた。

「もうっ・・何やってるの？ジーク？そんなんじゃ、私が全部刈り取っちゃうよ？」

そういったウラヌスに、ジークは「こっちのセリフだ！」とだけ言い返してまた戦闘を再開した。その様子を見て安心したウラヌスは、一瞬緩んだ顔をもう一度引き締めて剣を大きく振った。すると、剣身が伸びて相手を貫き、そのまま大振りに薙ぎ払った。その勢いに乗せてウラヌスは体制を立て直して進んでいた。その頃、その後ろでも戦闘は繰り広げられていた。

「ああっ・・もうっ！キリが無いのにお兄ちゃんは・・もう！邪魔よ！」

ナイフを投げて周りに均一にダメージを与えていたイヴだったが、後ろに回り込まれたことに気づくのが一瞬遅れた。ダメージを覚悟したイヴの目の前で、獣は頭に剣を刺されて魔力に還元されていた。

見ると、アダムが剣を構えてイヴを助けていた。しかし、アダムの剣には幾つものヒビが入っていた。どうやら脆いものを選んでしまったらしい。しかし、アダムはちゃんと戦えていた。

「イヴ！怪我は無い？俺は全くないから安心して。それから、皆にも言っておく！こいつらは召喚獣といって死ぬことはまず無い種族だ。思う存分戦ってくれていいぞ！」

大声で注意を促したアダムは、これでもかというほどに獣たちに肉薄して攻撃を仕掛けていた。

「そんなこと言ったって・・私たちの力じゃ・・ていっ！これぐらいしか出来ないよぉ・・」

かなり弱気になりながらもちゃんと獣を倒していたイグニスだが、不意を突かれて後ろをとられた。まずいと思ったイグニスだったが、獣は頭から尻尾にかけて一直線の穴を開けて魔力に還元されていった。イグニスが視線を巡らせると、皆が戦っている少し後ろでチェリスがスナイパーライフルのようなものを構えて獣に放っていた。どうやら自分で作ったものらしい。それにしても凄い完成度だ。

「イグニス！気をつけて！」

イグニスを注意したチェリスだが、やはり弾薬に不備があるのかしょっちゅうリロードして隙が出来ていた。その隙を埋めるようにチェリスの周りを守ったイグニスは、何度も何度も敵を倒していった。

「こりゃ、オルトロス出しちゃ酷だね。私だけで頑張るか・・」

そう呟いたミリアが杖で敵を殴りつけながら詠唱文を唱えた。そして、詠唱が終わるとともに一か所に集まっていた数匹の獣の足元から焔が巻き起こって獣たちが焔に呑まれた。「名づけて！デスサイズ・フレイム！なんてね！さぁ、次の相手は誰かしら？」などと喋っていたミリアを構う事もなく明らかに数で勝っている獣たちはい

ろんな方向から攻めてきていた。それを綺麗に潰していったミリアの表情は、楽しんでいる子供の顔だった。

「来ないで・・来ないでよ・・」

涙目になっていたクルスだが、獣が振り下ろした剛腕を軽々と受け止めてそのまま投げ返していた。余裕があるのか無いのだか。だが、ずっと抱き締めている動物のぬいぐるみだけは放そうとしなかった。余程大事な物のなのだ。あのぬいぐるみは。

「調子に乗って・・・跪け愚獣共ぉ！」

大声を上げながら剣を幾度となく振っているニンフだが、やはり大きさを間違えたようだ。やはり自分の身長ほどもある大きな剣を振れるはずもなかった。一度振ってはその重さに体ごと持って行かれていた。当然の如く息も早く切れる。そうなれば無防備になるのは誰だってわかる。そして案の定敵が襲いかかってきた。しかし、その鋭い爪はニンフを貫くことは無かった。

「僕も忘れないでよ！ニンフちゃん！しっかり？」

見ればイリアが苦無の様な形をしたナイフを手に獣を弾き飛ばしていた。その弾き飛ばした方向では、攻撃態勢に入った獣ばかりが構えており、その場所に命中して共々魔力に還元されていた。その狙い澄ました的中力は、普段からぼーっとしているイリアからは想像できそうになかった。

「サポートは任せてくださいね？それっ！」

イリアスが獣に何かをぶつけた瞬間に、それは獣を吸収するように呑みこんだ後に元の大きさに戻った。まるで大きさが定まっていなかった所を見ると、これはイリアスが面白半分で作った試作品なんだと分かった。それは、投げた本人の顔を見ても分かる。驚きの表情だ。

「かかってくるネ！愚獣共に、引導を渡してくれるヨ！」
気合を入れたアミは、獣を挑発しては来た所をかわして背後から一撃を喰らわせてノックアウトさせる一撃離脱法を使用していた。これではワンサイドゲームになってしまう。しかし、いまはそんな事をどうこう言っている場合じゃなかった。

「くっ・・・・ジュリエットォォォォッ！・・・邪魔だ！退けぇ！」
ジュリエットを視界から外そうとしなかったロミオは、襲い来る敵を一刀のもとに切り伏せてジュリエットに近づいて行った。そして、獣たちの間に隙間を見つけることが出来たロミオは必死にその隙間をすり抜けた。するとおかしなことに獣が襲って来なくなった。しかし、それを視線の隅で確認したジークには閃きのように考えが巡ってあっという間に答えが出た。その間、僅か0，1秒で、その内容とは「指定の範囲より前の敵を殺せ（または負傷させろ！）」だった。その命令を召喚獣が出てくる間に全てに指示を与えるとなるとかなりの消費が予想される。しかし、明らかに幼いヴィーナスにそんな事が出来るかどうかは難しかった。となると、タナトスがバックアップを執っているのかヴィーナスが天才なのかの二択に絞り込めた。おそらくは後者だろう。そう一瞬で悟ったジークは、目の前の獣を一気に薙ぎ払って神風の如き速さでダッシュした。すると、最初の方では追いかけていた獣だったがある一定の位置を過ぎると方向を変えてウラヌス達に襲いかかるようになった。

「なるほど、分かったぜ。お前ら、手加減してるだろ？」
ゆっくりと立ち上がったジークは、ヴィーナスに聞いてみたがヴィーナスはニヤリと笑うと顔を上げてジークを睨んで唸るように呟いた。

「あああああ・・もうっ！なんでこんなにも早く出てきちゃうの？も

ういいや。皆ぁ？こいつの彼女だけ狙いなさぁい？」
右手を振りかざして指示を出したヴィーナスは、再びジークを嘲笑うかのように睨みつけた。ジークが振り返ると、全方位から獣がウラヌスの上にのしかかろうとしていた。しかし、その獣たちは指示を実行できないまま魔力に還元されてしまった。それは何故か。ウラヌスは剣を構えたまま動かない。しかし、獣たちは全て消え去った。見ればウラヌスの頬には切り傷が出来ている。どうやら掠っていたらしい。すると、ウラヌスが剣を一振りした。空を切っただけにしか見えなかったが、よく見れば剣から血が払い落されていた。その血は色が少し濃い所を見ると召喚獣達の物のようだ。

「私が弱いと思ったわけ？ふざけないでよ。ヴィーナスだかボーナスだか知らないけど・・・私を甘く見ていたら・・・・死ぬわよ？」
出来るだけ平静を保とうとしているウラヌスだが、その顔は怒りが滲み出ていた。その顔に少し怯えたヴィーナスは、タナトスに抱きついて震えている。これではどちらが襲ってきたか分かったものじゃないとだけしかジークには言えなかった。そんな中、ウラヌスが一歩づつヴィーナスに近づくごとに震えが強くなっていることに気づいたタナトスが、目でジュリエットに突撃をかけるよう指示した。それに頷いたジュリエットが走りだそうとした瞬間、直ぐに足を止めた。

「ジュリエット・・・思い出してくれ・・・」
悔し涙を流しながら剣を構えたロミオだが、その手は恐怖で震えていた。それをチャンスと思って払いのけようとしたジュリエットだったが、頭の中を何かが過ぎって頭痛に襲われてその場に崩れ落ちてしまった。それを見たタナトスが小さく舌打ちしたが、その間にもウラヌスが近付いていることに意識を集中させてヴィーナスを持ち上げた。極端に泣きべそをかきそうな顔をして涙を我慢していたヴィーナスを見てため息をついたタナトスが、呆れ半分にも降伏し

ようとしたがそれを遮るようにヴィーナスが放った一言によって行動が限定的にされた。

「やめてくれ・・こうh「私に勝つのは無理でも、上等な方だったわよ。これで・・」「危ないっ！」

ウラヌスを馬鹿にしようとしていたヴィーナスだったが、背後に誰かが銃を構えてしゃがんでいたのを見つけたジークが二人を押して場所をずらした。その直後に、ジークの腕を銃弾が掠めた。その直後に気づいたチェリスが銃でその撃った者を仕留めた。味方である可能性も十分にあったが、銃声の音でチェリスは敵兵と断定していた。結果はその通りで、怯えながらのヴィーナスとタナトスが確認に行くとそれは見たこと無い顔だったが軍服は自軍のものだとはっきり分かった。

「なんで俺たちを狙って・・「馬鹿だな。お前ら。こいつは用意周到なことに腰にグレネードまで括りつけてある。と言う事は、さっきのを外したら今度は自分で自爆するつもりだったんだよ。」・・」自分の国を別に信じていた訳でもなかったタナトスたちにとって、国の裏切りは十分に考えられた。元々ヴィーナスもタナトスも意味は違うが人から恐れられた存在だ。それを抹殺したいと思っている将校等腐るほど居ることだろう。この頭を貫かれた青年もどこかからの差し金だとすると国を信じることなど到底できなくなった。心に痛手を負ったように握りこぶしを作ったヴィーナスだが、彼女の気持ちと精神に左右される召喚獣達は自動的に魔力に還元されていた。

「これって・・・私たちを消そうとした・・・って事なの？」

怯えながら口を開いたヴィーナスは、頭の中で自分の国で待っているであろう友達を思い浮かべてある共通点に気がついた。それは、誰もがヴィーナスが軍に入ることを進めていたことだった。今考え

てみれば、あれは正当な理由で自分を葬ろうとしているように思えた。更に、考え直せばその友達の親はヴィーナスの事を怪物のように扱っている連中ばかりだった。研究員、上位貴族、自称霊能師、超能力評論家や脳外科医、揚げ句の果てにはジェネラルと言う親衛隊出身者まで居る始末だった。誰が送り込んでも可笑しくなかった。この場は戦場だ。そこで命を落とすのは生きることと背中合わせなのだ。だから、敵兵の凶弾に見せかけて殺害させることなど誰でも出来た。しかし、だからと言って誰かを疑うこともしたくは無かった。それが怖くてヴィーナスは悔し涙を流すしか出来ないでいた。

「チェリス・・・その銃・・ちょっと貸してくれ・・後、アダム・・・能力で紙みたいな鉄板を二枚頼むぞ？硬度は柔らかめで頼む。」それだけ言ったジークは、腕を組んで動かなくなった。直ぐに球を込めなおしたチェリスは、ライフル用のロングバレルを取り外してジークの足元に置いて何歩か後ろに下がった。そして、周囲から集めた鉄分で鉄板を作り出したアダムが、それをジークの足元に置いて数歩下がった。そこでやっとその二つを拾い上げたジークがヴィーナス達の元に歩み寄った。そして、二人の目の前で鉄板を銃で撃ちぬいた。その音に驚いたヴィーナスは、タナトスに抱きつく様にして涙を必死にこらえていた。

「ヴィーナスとタナトスだっけ？お前らは・・・今此処で俺に銃で撃たれて死んだ。お前達はもう誰でも無い。只の一市民だ。自分の足が有るんだったら自分で自分の道を歩め。」貫いた鉄板を二人に手渡したジークはこう続けた。その時のタナトスの表情は、哀しみと憎しみが交差したような歪み顔だった。

「此処で弾を一つ無駄にしたが、お前達の命はなんにだって一つだ。俺には、それを守るだけの力がある。ヴィーナス、タナトス。一緒に来ないか？ユニバースに・・・いや、違う。俺達のアルテマ小隊・

・違うな・・俺達のジークフリート邸に。」自分の館に来るかどうか問い質したジークの前で、ヴィーナスは涙で目が赤く腫れるほど泣きじゃくり、タナトスも悔しさのあまりに目を開けられないでいた。

「ジュリエット！ジュリエット！ジュリエット！」
緊張のあまりに力を抜けないでいたロミオがやっと剣を落としてジュリエットを抱きかかえた。すると、ジュリエットが目を覚ました。が、ロミオが無事を確認する前にジュリエットはこう呟いた。

「私は誰？」
その言葉に、ロミオは絶句してタナトスは「そんな馬鹿な！」と声を上げていた。そして、タナトスには何故こうなったのか見当が付いていた。元々ジュリエットは少し前にジェネレーション国際技術部が技術協力という名目で連れてきた少女だった。その頃は（と言うより今の今までで彼女が囚われの身だと知らなかった。）何も知らなかったタナトスが、技術部に頼まれて育成を頼まれていたのだ。それがどんな物なのかは知らなかったが、国際技術プロジェクトチームの名前だけなら覚えていた。その技術チーム名とは「インヴィシブル」だった。

「・・・泣き疲れたのかな？寝てるよ。俺に抱きついて・・・」
暫く口も開けなかったタナトスだったが、不意にヴィーナスを見てそう呟いた。その目は、優しい男の目をしているとジークは思った。そして、ヴィーナスを持ち上げたタナトスは改めてジークの方を向くと、頭を下げて「よろしく頼む。」とだけ言った。その眼に、嘘偽りの濁りは一滴も存在していなかった。そして、ジークが乗ってきた大きな方の馬車に全員を乗せ、ミリア達を引いてきた方の馬車の馬も繋いでタナトスが馬車を操って首都への帰路に付いた。

第１５説　激動（後書き）

風を切り走る馬車の中で
ジークはタナトスたちを国にどう紹介するか迷っていた
しかし、その難題は一瞬で解決される。
「スカウトした新人兵とその妹で良いんじゃない？」
ウラヌスの何気なかった一言で全ては幕を閉じて馬車は走る
そして、ついにグリーンホープへとジーク達は戻ってきた。

次回　第１６説　ようこそユニバースへ・・・
仲間を勝ち得て、喜びを手に入れろ！ジークフリード！

第１６説　ようこそユニバースへ・・・（前書き）

戦闘も終わり
晴れてタナトスとヴィーナスを迎え入れたジーク
しかし、馬車の中では問題が起きようとしていた
始まり！

第16説　ようこそユニバースへ・・・

タナトスが操る馬の中で、ジーク達は頭を悩ませていた。主に悩ませていたのはジークとヴィーナス、それにアダム位なもので他はジークの馬車内を見まわして眼を輝かせていた。やはり兵士用の馬車と将軍職の馬車とでは雲泥の差があるらしい。

「どうするべきだろうなぁ・・・」

「う～～ん・・どうしたものかなぁ・・」

「どうしましょうか・・」

三人そろって同じようなことを呟いていたのを聞いたウラヌスだが、はっと閃いて人差し指を立てて意思表示をした。それに気づいたジークがウラヌスの方を向き、それに合わせてヴィーナスとアダムがウラヌスを見つめた。それに少し驚いて引きそうになったウラヌスだったが、すぐ隣のジークに当たって後ろが塞がって困り顔をしてジークを見つめたが、首を横に振って「諦めろ」と言いたげな表情をしたジークを見て落ち込んだウラヌスはやっと口を開いた。

「う～んとね？私が思うに、二人にそれなりのシナリオを付けて誤魔化せば将軍である私とジークが居るからパス出来ると思うの。どうかな？」

少々自身無さげに説明したウラヌスだったが、根本的に考えればそれは正解だった。もともと、グリーンホープには関所が入り口にあって侵入者や妖獣が入ろうとしていないか等を観察、および交通させている。しかしそんな人たちでも将軍職には全く頭が上がらないので多少の我が儘は許させるだろう。それに、もしもタナトスたちが通れなさそうな危機になったらウラヌスが「この人達は難民なの！私たちが保護した！」と言うだけで関所の人間は通すことになるだろう。

「なぁるほど。それなら可能だな。」
それに続く様にして賛成の意に辿りついたヴィーナスも、ジークと同じ意見を掴んでいた。その点で考えると、ヴィーナスとジークの頭の良さが手に取るように分かるほどになる。ただ、ウラヌスが考案したのにはそれと言った理由が無く、完全な勘から生まれたものなのであった。

「私が国に住むようになったら・・・どうすればいいのやら・・・」
眼の前の障害が消え去ったヴィーナスは、さっそくその後の事に付いて考察することになっていた。それが自然なのだが、やはり天才は格が違った。考察の手順を幾つかスキップしていたのだ。

「それならさっきも言ったが、ジークフリート邸に身を寄せるといい。俺の認めた者たちだ、歓迎するよ。」
そう言ってヴィーナスに手を伸ばしたジークは、そのまま頭を撫でてあげた。すると、少し恥ずかしそうな表情をしたヴィーナスだった。その隣で、少し妬ましそうな顔のウラヌスの姿があったのを知る者は誰もいなかった。そうこうしている内にグリーンホープへとつながる関所に到達して門番に止められた。

「停止願います！将軍馬車（ライセンス）ですね？搭乗者を見させてもらいます。宜しいですね？」
特にこれと言ってタナトスを疑う事もしなかった門番は、そのまま馬車の扉を開いた。そこには予想通りにぎゅうぎゅう詰めになっているのが確認できた。なぜこうなったのか聞こうとした門番だったが、すぐにジークが「馬車を1台パクられただけだ。」と言って簡潔に説明した。その説明で納得した門番は、そこで馬車から下りて門を開いて馬車を通した。

「案外簡単に入れたわね。私の予想だと、一人一人ボディチェック位受けると思ったのだけれど・・」
そう思っていたヴィーナスだったが、なにか一悶着ある訳でも無く通ったので何か煮え切らないような表情になっていた。すると、ぎゅうぎゅうなのにも関わらずスイスイとヴィーナスの元に来たイリアスが、手に提げていたバスケットからミカンを一つ取り出してヴィーナスに「どうぞ？」と言って手渡した。どうやら皆に配っているらしく、既にジークもミカンの皮を剥き始めていた。

「良く膨らんでて美味しそうね・・・いただきまぁす！」
お礼を言って受け取り、ミカンの皮をむいてみたヴィーナスはその大きさに驚いた。皮を剥けば多少は大きさが小さくなるはずなのだが、このミカンは皮を剥いても全然大きさに変化が無かった。しかも膨らんでいる割に柔らかくてすぐにでも口の中で蕩けそうな程だった。

「タナトスぅ！・・ってあぁ！タナトスもミカン食べてる！」
窓から身を乗り出して、タナトスに抱き付こうとしたヴィーナスだがその手に持っていたミカンを見て驚いた。本当は驚くことでもない筈だ。イリアスは、いろんな者に・・それこそ一人に幾つかづつ渡している様な程ミカンを持っていたのだ。何処から持ってきたかは分からないが、とりあえず手元にあるのでタナトスも受け取っている筈だ。

「窓から身を乗り出すな！手綱が操れないだろ！？やめ！・・やめるんだ！」
肩に抱きつかれて、馬の手綱を動かせそうにない姿勢にされたタナトスがヴィーナスに解放を求めたが、ニコニコしているヴィーナスが放すことは無かった。何度か同じことを言ったタナトスが、ため息をついて馬の速度を上げた。その衝撃でタナトスから離れたヴィ

ーナスは、少しばかり寂しそうな顔をしていた。

「あれ？みんな？ミカン食べて眠くなっちゃったの？」
ウラヌスが、食べ終えたミカンの皮をゴミ箱に捨てるとそこでやっとメイドたちを始めとする皆が寝息を立てている事に気づいた。隣ではジークも同じように静かな寝息を立てて眠っていた。起きているのはミカンを食べなかったイリアスと、ミカンの皮をしゃぶってから捨てていたウラヌス。それとミカンを半分しか食べていなかったタナトス&クルスだけだった。

「・・・あれ？・・・おかしいな・・・眠く・・・なって・・・ｚｚｚ」
起きている人数を確認し終えた直後に眠気に襲われたウラヌスは、薄れ行く意識の中で不敵に笑うイリアスの顔が見えて意識が切れた。同じようなタイミングで眠りに付いてしまったのは、ミカンを半分だけ食べていたクルスとタナトス。これでイリアス以外は全員が眠ってしまったことになる。因みに馬車引きのタナトスが眠ってしまったので馬は足を止めている。どうやら休憩も兼ねて川の水を飲んでいるようだ。

「さて、これで邪魔者は居なくなりましたね？これで思う存分お兄ちゃんと・・・キャハッ！」
周りを見回して、全員が眠っている事を確認したイリアスがこれから自分のしようとしている事を思い浮かべて顔を真っ赤にして手で顔を覆った後、胸をドキドキさせながらジークの眠っている顔へ段々と近づいて行った。しかし、キスが成立する直前で誰かの手がイリアスの顔を押さえて引き戻した。

「！？！お兄ちゃん！」
イリアスを止めたのは、寝ている筈のジークだった。何故ジークが起きているかと言うと、ミカンを食べている最中に意識が飛び始め

たジークは、反射的に自分の腹を殴って痛みを覚えていたのだ。目を覚ますときはその痛みを目印にして目を覚ましたという訳だ。しかし、計画が失敗に終わったイリアスが体全体をブルブルと震わせて怯えていたのを、ジークはイリアスを抱き締めてなだめてやった。少し予想外だったイリアスは、驚きに目を見開いて心をドキドキさせていた。

「これも子供の悪戯なんだ。きっと女の子だったら少しは垣間見ることもあるかもしれない。それを眼の前でされたってだけだ。お兄ちゃんは怒っちゃいないぞ？怖がらなくていいんだ。分かったか？」子供をなだめるように優しく澄んだ口調で話したジークは、イリアスの頭を撫でながら説得していた。すると、泣きそうとも嬉しそうともとれるような表情でイリアスは「はい！」とだけ頷いてジークをギュッと抱きしめた。今の彼女にとって、この瞬間は一生忘れられない瞬間になったことだろう。暫くして、皆が眼を覚まし始めたので、タナトスも眼が覚めた時点で馬車は再出発した。因みに、先程の出来事はジークが内緒にするようにイリアスに言ってあった。すぐそこまで来ていた為か、あっという間にグリーンホープに着いたジーク一行は城への報告の前にメイドたちをジークフリート邸へと降ろすべく自宅へと馬車を向ける為にジークがタナトスに的確に指示して言った。そのおかげですぐさま到着したので、メイドたちを降ろしたジークは馬車屋と呼ばれる貸家へと馬を返した。そしてあっという間に玄関口まで来たジークだったが、ウラヌスを家に帰してやっと一息つけた。

「はぁ・・・やっと帰って来たぁ・・」

ため息を吐きながらも階段の最初の段にもたれ掛かったジークは、それぞれにメイドの仕事に取り掛かっている皆を見て少しばかり安心して目を閉じた。しかし、睡眠も取れないうちにイヴに起こされたので少し不機嫌そうな顔をしていた。

「お兄ちゃん！タナトスさんと話をしてあげて？なんだかあの人、凄くオドオドしてるみたいだから。」
ジークが、イヴに手を引っ張られてリビングルームへ行くとそこには、呆れて物も言えないほどに疲れた顔をしたタナトスと、その膝でスヤスヤと寝息を立てているヴィーナスがいた。一見、タナトスがオドオドしているとは思えなかったが、ジークが彼の目を見て少し確信に変わりつつあった。タナトスの目は、全てを見失ったかのような目をしていた。すると、タナトスに歩み寄ったジークがタナトスの頭に触れてこう呟いた。

「・・ようこそ、ユニバースへ・・」
若干カッコつけたセリフの様に聞こえるが、挙動不審に陥りかねない状況になりつつあったタナトスを安心させるにはそれだけで十分だった。そして、そんなこんなで国への報告も済ませたジークは、屋敷でくつろいでいた。

第１６説　ようこそユニバースへ・・・（後書き）

タナトス達がやって来た次の日の朝。
ロミオが目を覚ますとそこにはジュリエットがいた。
そして、ロミオが取った行動とは・・
そして同じ頃、ジークにはアクシデントが起こる。
次回　第１７説　愛情

目の前に築かれた！恋への扉を、自分で開けろ！ロミオ！

第17説　愛情（前書き）

タナトス達がジークの元に来てから一日が経過した。
そして、ロミオには恋の季節が
ジークには不穏な影が・・・

開始！

第17説　愛情

朝の陽ざしに力が出てきて、やっと朝だと感じられて来た明け方。それぞれのベットでは、先日に武器を振り回していた少女達だとは思えないほど気持ちよさそうにして寝ている少女達の姿があった。それから暫くして、朝も本格的になって来た頃になって一番最初に起きたのは、主のジークでもメイド達でも無くロミオだった。しかし、ロミオは目の前の光景に唖然とするしか出来ないでいた。

「・・・・じゅ・・ジュリエット・・・？どうして・・・・」
ロミオが慌てている理由。それは、彼のすぐ横で眠っていたジュリエットが主な原因だった。ロミオが目を覚ました時、目の前にジュリエットがいて驚いて声が出そうになって声を殺して何とか落ち着いた所だった。

「・・ん・・・・・うううん・・・・！？・・・えっと・・・・お早う・・御座います・・」
どうやら寝起きで驚いたのはどちらも同じなようで、ジュリエットも驚きを隠しきれずに体を震わせて驚いていた。そして挨拶を済ませて起き上がった。その時の彼女の顔が赤くなっていたのは言うまでもない。

「ところで・・・その・・・・・わ・・私に・・変なこととか・・してませんよね・・？」
顔を真っ赤にしながらベットのシーツを手繰り寄せて、まるで自分の体を守るようにして身構えた彼女は、これまた顔を真っ赤にしながら恥ずかしそうにロミオに聞いた。それに顔を真っ赤にしながら否定したいように手を振りながら大慌てで否定したロミオは、胸のドキドキが止まないうちにベットから起き上がった。そして自分は

椅子に座り、何も喋れそうに無くなっていた。

『・・・あの！』

二人の声が重なって、お互いに恥ずかしくなって一瞬言葉が詰まった。しかし、ジュリエットが言う順番を譲るように「どうぞ」と控え目な声で言ってくれたので、ロミオは少し気が楽になってなんとか言葉が出るようになってきた。

「・・えっと・・その・・・・ジュリエットは・・」

言葉を続けようとしたロミオだったが、次の瞬間・・

「起っきろ～～っ！朝だぞぉ～～！」

ドアが勢いを付けて開かれてミリアがやってきた。その豪快なまでの勢いに脅かされた二人は、一瞬だけ何が何だか分からなくなった。それに引き換え、ミリアは朝からハイテンションでロミオを起こしに来ていた。しかし、ミリアも想定外の出来事が起こっていた。それが、ロミオとジュリエットの傍から見ればイチャイチャしているところだった。

「・・・ええっと・・・・・私が悪いかしら？・・・・・それじゃ、続きをどうぞぉ・・」

二人の事に邪魔する気など無かったミリアは、少し苦笑いをしながら部屋を出て行った。その後には、気まずい沈黙だけが残っていた。

一方、目を覚ましたジークにも少々奇妙な事が起こっていた。

「・・・おかしいな・・・・・ちゃんとベットで寝たよな・・」

やっと目を覚ましたジークは、目の前の状況をいまいち理解することが出来なかった。ジークの周りでは、数人のメイド達が寝息を立てていた。そこまではまだ許容範囲内に入っていると思ったジークだが、それ以前に自分がリビングルームの長テーブルの上で目覚め

た事の方が衝撃的だった。

「・・んんっ・・・あっ・・・おにいちゃん・・おはよっ。」

ジークの目覚めのタイミングでも計ったかのように丁度よく目を覚ましたのは、欲張りにもぬいぐるみとジークの腕を両方抱いていたクルスだった。すると、まるでクルスの起床がトリガーになっていたかのように皆が目を覚まし始めた。

『おはよう！お兄ちゃん！』

皆が声を合わせて挨拶したのだが、やはり人数が多いせいなのか部屋の気温が上がって来ていた。ジーク自身も眠る前に風呂に入ったのに服が汗ばんでいた。それはメイド達にも言える事なのだが、流石に皆が用意周到だった。それぞれに自分の為のタオルを持っており、それで拭いていた。何故もう一枚持っているのかと思ったジークだったが、その理由は直ぐに分かった。

『お兄ちゃん！これ使って！』

そう言われ、様々な方向からタオルを差し出されたジークだったが、どれを受け取るか困っていた。すると、今回に限って積極的なクルスがジークの額を拭いてあげた。お礼を言ったジークだが、次の瞬間には皆まとめてジークを拭いてあげようとして手を伸ばし、結果としてジークが殴られる形になっているとは、メイド達は知りもしなかった。しかし、やはり子供だ。それほどの力は無いのでジークは気にしなかった。

「・・兄上、メイド達を・・兄上っ！」

ジークが殴られることに痛みを覚え始めた頃、アダムがジークの部屋に紅茶を持って入って来たがその惨状を見てティーセットを投げ、メイド達の暴走を手刀一つで静めてあっという間に片付け、彼が手を掲げるとその場所にティーセットが見事に落下してアダムは一滴

も零さない様にキャッチした。

「・・助かった・・感謝するぞ。アダム。で？こいつらがどうしたって？」

アダムに助けられ、何とか自力で立ち上がったジークは、ふとアダムが部屋に入るときに言っていた事を思い出した。断片的にしか聞こえなかったが、予想でこのメイド達の事だと思ったジークがアダムに聞いた。そして、次の瞬間にはメイド達の髪に髪飾りらしきものを付けているアダムがいた。別にやましい事をしている訳じゃない。ただ、メイド達に何か細工をしているように見えていた。

「・・出来た。そうだ、兄上も要りますか？ヴィーナスさんが作ってくれた護身符なのですが・・」

全員分付け終わったアダムが、ジークの方を振り向きながら持っていた物の説明をした。しかし、ジークは躊躇なくその申し出を断ってリビングを出て行った。その直後にアダムがメイド達を横一列に寝かせて部屋を去ったのは余談である。

「・・・（ヴィーナスが護身符を配った？どうやら、信頼してくれているようだが・・・こっちが信頼しなくてはあちらが可哀そうだな。）・・・お？タナトス・・ヴィーナスも一緒だな。」

ジークが考え事をしながら廊下を歩いていると、対向方向を歩いてくるタナトスと鉢合わせた。その背中には、疲れ切ったのかだらしなく口を大きく開けて眠っているヴィーナスがいた。こういう所を見ると、ヴィーナスとタナトスが兄弟のように見えてくるかもしれないが、本人達が嫌がりそうなので止めておいたジークは、ヴィーナスの頭をそっと撫でて耳元で「ありがとう」と呟いて撫でるのを止めた。

「・・おっと！そうだ主。実は・・「にぅ・・」・・・すまん・・」

再び歩き出したジークとタナトスが、離れて行きそうになった時になって何かを思い出したかのように再びジークに声を掛けたタナトスが続きを伝えようとした時、タナトスのコートの中から一人（一匹？）の子猫ほどの大きさしかない女の子の様な、猫耳を付けた生き物が這い出してきた。それを見てタナトスが何を言いたいか分かったジークが頬を微妙に吊りあげて笑いと怒りを堪えていた。申し訳ないと思ったタナトスが申し訳無さそうに頭を下げたが、ジークはあっさり許してしまった。その理由は、ジークの思いに有った。

「（あんな大柄のタナトスが子猫・・ブハッ！もう無理！後で影で笑い散らさなくちゃ！）」

そんなこんなで抱腹絶倒寸前まで笑いを堪えたジークは、適当にタナトスに挨拶だけして廊下の突き当たりを曲がったところで腹を抱えて座り込んだ。傍から見れば腹でも下したかのように見える構図だ。実際に、その構図と勘違いした者がいた。それは、いつの間に起きたのか掃除に取り掛かっていたアミだった。

「お兄ちゃん！どうしたアルか！？痛いアルか！？ちょっと待ってるヨ！いま医者を・・」

目の前でいきなり腹を抱えてしゃがみこんだジークを見たアミは、大慌てでジークに声を掛けるだけ掛けて、間髪いれずに医者を呼ぼうと何処かへ行こうとした。しかし、実際の所は笑いを堪えていただけのジークだったので、アミを止めることは造作もなかった。掴んだ場所がふとももだったのがいけなかったのか、アミが少し顔を赤くして驚いていたのは余談らしい。

「ちょっ！お兄ちゃん！私・・・まだ心の準備が・・・」

ジークからすれば何を言っているのか分からなかったが、適当に「それじゃ、また今度な？」とだけ言って立ち上がろうとしたが、物凄く不満そうな表情でアミがジークを押し倒そうとした。しかし、

そこはジークの反射神経の勝利で、アミがジークを押し倒して（以下略　な事は起こらなかった。

「何やってるんだ・・・それじゃな？」

それだけ言ってジークはその場を去って行った。後には、涙目のまま倒れ伏しているアミの姿、そのすぐ隣のテーブルに無駄に置いてある花瓶だけになっていた。その花瓶に入っていた花は「ハイテンション」と言う、興奮作用と媚薬効果を兼ね合わせた花粉を持つ花だった。しかも花は満開なので花粉も多少は飛んでいる。要は、先程のアミの暴走は、花粉によって増幅された興奮が抑えきれなくなってジークに抱き付こうとした訳である。植物、おそるべし！一体誰がこんな物を置いていたのかは不明だ。元々、知識の豊富なアダムやイブはこんなものを取り寄せる訳が無い。それ以外にもいくつか心当たりを探しては見たが、どれもこれも違っていて外れている。そんな考え事をしているジークは、無意識のうちに庭の裏側に来ていた。そこでは、とある人物が庭の手入れをしているのだった。

次回に続く！

第１７説　愛情（後書き）

無意識のうちに惹かれるように裏庭にやって来たジーク
そこでは、一人の少女が手入れをしていた。
そして、ジークはその少女に不信感を抱く

次回　第１８節　壊れた人形　お楽しみに！

第１８説　壊れた人形（前書き）

無意識のうちに裏庭へとやって来たジーク
そこでは、一人の少女が庭の手入れをしていた
ジークの見た覚えのないその少女は
一体、何が目的で此処にいるのか

開始！

第１８説　壊れた人形

館内での一騒動から少し経ち、フラリと館の裏庭へとやって来たジーク。そこには、小さな少女が庭に手を突っ込んで雑草を抜いては種を撒いてを繰り返していた。しかしジークには違和感があった。この館にあんな少女はいただろうか。そりゃ、小さい子供だらけなのは分かる。しかし、その顔をジークは見た覚えが無かった。

「・・そこで何してるんだ？」

不思議に思いながらもジワリと近づいて行ったジークにやっと気付いたのか、草むしりをしていた少女はやっとジークに気が付いた。それを見たジークの第一印象「・・（ゴスロリ？）」

「何って・・・草達の手入れですけど？」

何故質問されたのか分からない様に、今の現状だけ教えた少女はまた草むしりを始めた。今の返答でだいたいの予想は着いた。どうやらこの子もイヴが拾って来た子なのだろう。しかし、ジークが帰って来た時も此処で草むしり。出陣の時も此処で花と戯れていた。しかし、幾つか疑問は残った。たとえば、何故イヴはこの子を紹介しなかったのか等が挙げられた。

「ええっと・・・そうなんだ・・分かったよ。それじゃ、続けてて？」

謎を残したままその場を去ろうとして後ろを向いたジークだったが、その瞬間に何処からともなく殺気が滲み出ているのを感じたジークは驚いて振り向いた。しかし、そこには先程の少女一人しかいない。おかしいと思いつつも再び戻ろうとして、今度は武器が飛んでくるのを感じ取ったので飛んで交わした。その時に振り向いたジークは、己の視界を疑った。

「えっ！どうなって・・」
ジークが見た物は、先程の少女が小さな自分の分身、もしくは仕掛け人形の様な何かを大量に放ってこちらに投げて来ていた。その時の少女の目には、殺意が目で分かるほどに湧きでている。それほどの恨みでもあるのかと思ったジークだったが、彼女は考える時間など与えないつもりらしく、攻撃は止む事もなく激化して言った。流石に体力のあるジークでも疲労が見えて来た。しかし、ふと攻撃がやんだのでジークも足を止めた。

「・・・何故・・こんなことを・・」
少し足元をふらつかせながらも立っていたジークは、少女を問い詰めようとした。しかし、頭がフラフラするのを感じて少しバランスを崩してきた。

「そろそろかな・・」
少女が、持っている人形に呟く様に話しかけていると、ジークは意識が薄れて行くのを感じていた。理由はどうあれ、目の前がかすんできた事が事実であるジークは、辛くても立っていようと足を踏ん張った。しかし、踏ん張りもいつまでも続かずに倒れそうになった。そして、倒れそうになった瞬間に後ろから何かがジークに刺さった。

「・・痛っ！」
ジークが刺さった物を見てみると、それは人形が木の枝を持ってジークをつついている姿だった。それを見ていた少女は、驚愕で体が止まっていた。その隙を見つけたジークが、一気に間合いを攻めて裏拳を少女の寸前の所で留めた。それだけでも、驚愕していた少女は力が体中から抜けたようにしゃがみ込んで、開いた口がふさがらないでいた。

「まったく・・なんだってこんなことを?」
頭を掻きながら、ため息を吐きつつ少女に呆れていたジークは、少女に何故こんな事をしたのか聞こうとした。しかし、少女は何も喋ろうとはしなかった。不審に思ったジークが少女の顔を良く見てみたが、特にこれと言った外傷もない。となれば、目を開けたまま気絶していると考えるのが妥当だった。しかし、ジークはこのままこの子を自分の屋敷に入れても大丈夫かどうか不安になっていた。目を覚まして、また襲われても迷惑なだけだ。しかも今度は館内だからメイド達にも被害が及ぶかもしれない。眉を吊り上げて必死に考え込んでいたジークだが、バランスを崩したのか少女が倒れそうになっていたのでジークがささえてあげた。　その時、少女の服の中から一枚の紙切れが落ちたのを見たジークは、それを拾って読み上げて見た。
長いので要約すると、彼女の名前はフォル二カ・ネルス。書いたのは別人のようだった。なにしろ、漢字ばかりだったからだ。そして、この子には能力があるらしく、ジークの元に送り込まれて来たらしい。これでは脅迫文と何ら変わりない。しかし、この少女自身はしっかり者なのか封筒の隅に自分の名前を書き足していた。因みに差出人の名前は無い。子供と言う所も考えると、結果は見えていた。

「・・・どう説明しよう・・」
気が付いたら襲われたとも言えないジークは、少女を支えたまま茫然としていた。そんな状態を続けていると、腕が疲れて来たのでフォル二カを降ろした。すると、フォル二カの周りを幾つもの人形が何処からともなく現れて彼女を守るように円陣を組んだ。どうやら、フォル二カは能力持ちの様だ。アダムやイヴも能力を持っているが、流石に気絶してしまうと使えない。しかし、フォル二カは違っていて意識が無くても人形を操れるようだった。暫くの間は様子を見守っていたジークだが、人形がジークの方にも寄って来た。不思議に思って人形を見守っていたジークの目の前で、何処からともなく取

り出した塗り薬をジークの気付かない場所の傷口を塗り始めた人形達。それでジークにある仮説が浮かんだ。もしかすると人形の意志は彼女にフィードバックされているのでは？という、至極単純なことだったが先程まで危なかったジークにしてみれば、その程度でも少し時間を食ってしまっていた。

「ご主人？どうかしたかニャ？」

ここで運悪く、庭の掃除に当たっていたミリアが裏庭に異変を（主にジークの）感じて駆けつけて来た。その状態で彼女が見た物は、横になって気絶している少女とその隣でひとりでに動く小さな女の子の形をした人形に薬を塗ってもらっている当主の姿だった。思考が若干卑猥に出来ているミリアは、まず最初にジークを悪い方向に考えて反射的に覗いていた場所を飛び出した。その時、ジークの慌てる声が聞こえて来たがミリアは気にせず館の中へと駆け込んだ。

「みんな～～！ジークが・・」

館の玄関口で大声を上げて皆を呼びだそうとしていたミリアだったが、途中で足を滑らせて顔面から転んでしまい、痛みのあまりに気絶してしまった。その後、駆け付けたアミが軽々とミリアを持ち上げて皆の元へと持って行ったのは約3分後だった。その後になって、異変に気が付いたクルスが裏庭へと訪れていた。

「・・可愛い・・・」

クルスが、いつも常備しているぬいぐるみをぎゅっと抱きしめて、ジークの世話をしている人形達を見つめた。その眼は本当に少女そのものだった。クルスの声に気が付いたジークは、クルスを呼んだが当のクルスは恥ずかしがってなのか館の入り口へと走って行ってしまった。その後、驚異的な回復速度で傷が癒えたジークはフォル二カを抱えて館へ入り、みんなにフォル二カを紹介していった。本人は眠っているから目を覚ました時には驚くことだろう。そして、

ジークは疲れたので玄関口の壁にもたれ掛かって寝息を立て始めた。

第１８説　壊れた人形（後書き）

安らかな眠りは心を癒す
内容にもよるが自分を傷つける
ジークは夢を見る。そして、館では緊急事態が？！
次回　トラウマ　番外編　乙女の園ｐａｒｔ１
過去の柵を超える事は出来るのか？！ジークフリート

第１９説　トラウマ　番外編　乙女の園ｐａｒｔ１（前書き）

夢とは、見れば心地よくなれる物もあれば
逆に、自分に牙を向いてくるような悪夢も存在する
昼間からぐっすりと眠っていたジークが見る夢とは一体・・・
その頃、事前にアダムに叱られたのではやる気持ちを押さえて
館の掃除をしていたメイド達は
ある者は愚痴を言いながら掃除をしていたり
ある物は掃除がてらに発明品を模索していたりした。

『開始』

第19説　トラウマ　番外編　乙女の園part1

フォル二カの謎の襲撃から少し経過したその頃、ジークは壁に凭れて眠っていた所をアダムが寝室まで運び入れてスヤスヤと寝息を立てていた。一応、無警戒では危ないと言う事で部屋にイリアを護衛と言う名目で置いておいた。事実上は部屋の掃除だが過ちを一番犯さなさそうであったイリアを、アダムがちょいとした信頼から選んだのだ。

「・・・なんで緊張してると僕の掃除スピードって速くなるんだろ・・」

イリアは、少しだけ紅潮している顔を押さえながらジークをただただ見つめていた。掃除の方はと言うと、イリアの性格上なのか、こういう時に限ってチャチャッと終わらせてしまうのだ。顔を赤く染めて動かないイリアだが、無防備なのを承知の上で顔を一気に近づけた。自分から過ちを犯そうとしたのだ。しかし、ジークの呟きによってイリアの動きは止まってしまう。

「・・母さん・・」

その一言の呟きは、イリアの動きを止めるのには何故か十分だった。思いとどまったイリアは、少し悲しくなりながらも顔を離した。そして、真面目に護衛と言う任務に着いたイリアは心の中で「絶対に守る」と固く決意した。そんなジークの夢は、呟きとは全く関係の無いものだった。たまたま夢の最初に母親が登場したと言うだけであって、後は悪夢の始まりだった。

「・・・（俺は・・）・・」

ジーク自身、此処が夢なのか現実なのか掴みかねていた。しかし、廻りの壁や窓ガラスの配置をはっきりと覚えていたジークには、此

処が何処なのかはっきりと分かった。ここは、ジークフリート邸の前身であるテスタロス邸で間違いなかった。

「・・・（これは・・）・・・」

夢の中の自分は、あの頃に・・そう、小さな頃の自分になっていた。それから起ころうとしていた事もはっきりと覚えている。どうしても違う未来が見て見たいと思うジークだが、体が言う事を聞かずに以前と同じ歩を進めている。自分自身でもどうにもできない。そして、あの手紙を読む時間が刻一刻と近づいて行った。

「・・（今なら分かる・・これ、要は覚悟を決めろって事だったんだな・・）？」

手紙に走っている字を読み上げ、体では理解していないが自分自身は理解しているジークはこの後の事に関して思い出すのも嫌になって来た。しかし、やはり予想通りに部屋の前を一人のメイドが通りかかって自分で声を掛けた。自分自身では嫌なのだと分かり切っている。しかし、これは夢だ。過去の事に自分が干渉することなどは出来ない。

「・・・（それでこの後・・！）・・」

夢の、そしてあの時の通りに廊下を進んでいたジーク。しかし、今の理解力があったからこそ分かった新事実が一つあった。自分が廊下を歩く音に紛れて、遠くでガラスの割れる音がした。小さい時には聞こえなかった音だった。深層心理が覚えていたのだろう。そして、暫くしてからリビングルームに辿りついた。そこからは記憶の通りだ。目の前には真っ赤に染まった血の海。そして、その次の瞬間には隣にあのメイドが突っ立っている。それを見たメイドが、ジークに目隠しをさせて担いで廊下を走る。そして背後からあの獣に引き裂かれて絶命する。そしてジークは怒り狂って獣へと突撃。その時、ジークは違和感を覚えた。

「・・・（あれ？ミリアのオルトロスってこんなのだっけ？）・・」
暫くの間、違和感を拭い切れなかったジークだった。しかし、目の前で奴が消えて行く最中にある事を思い出した。

「・・・（そうだ！目の数だ！）」
ジークの予感は的中していた。一見、この怪物とミリアのオルトロスは同じように見えるのだが、こいつには目が六つあるのに対して、ミリアのオルトロスは確か二つだった。それに、消え方にもムラが無い。どうやら相当の召喚師らしく、魔力還元の消え方がどこも均一に消えて行っていたのだ。

「・・・・ハッ！」
幾つかの相違点を残しつつも、ジークは夢から帰って来た。それこそトラウマの再現だったが、収穫もあったと言えば有った物だ。それを忘れないようにと頭の中で復習したジークは、ペンを求めて布団から手を伸ばした。

「・・・キャッ！お兄ちゃんっ！アワワワ・・・きゅ～・・」
顔を枕に埋めて手を伸ばしていたジークは、何も見えない状態のままで何かを掴んだ。しかし、その感触はとても柔らかくて、とてもペンや紙には思えなかった。しかも隣からはイリアの驚くような声。嫌な予感がしたジークは、慌てて手を離して顔を上げた。そこには案の定、顔を真っ赤にして少ない胸を庇ってダウンしているイリアがいた。どうやらずっとジークの目の前に突っ立っていたらしく、イリアがダウンしている位置はジークの直ぐ隣だった。ため息を吐きながら布団から這い出して来たジークは、先程まで自分が使っていたベッドにイリアを乗せて布団を掛けた。そこから暫くは、窓を開けて外を眺めるだけだった。その頃、目を覚ましたフォル二カはメイド達の眼差しに包まれていた。

「・・・・・」
少し前に目を覚ましたフォル二カは正直驚いた。目を覚ますと目の前には小さな女の子たちが自分を取り囲んでいたのだから。そして、そこからはみんなが口々に喋る物だから何を言っているのだか分かった物ではない。

「・・あの・・一人づつ喋ってくれる？」
みんなが目を輝かせながら口々に質問したり雑談したりしている中、フォル二カは人差し指を立てて口に当てた。それを皆も真似てやっと静かになった事に一安心したフォル二カは、改めて周りを取り囲んでいる少女達を見回した。どの子も幼い。二・三人ほど大人っぽい人もいるが、この少女達に混ざっていると言う事は精神的には幼いだろうと直感だけでフォル二カには分かった。とりあえずは自己紹介してメイド達の名前を全員分聞いたところでやっと落ち着いたフォル二カは、ちょっと疲れてしまった。

「・・おつかれさま。」
一息吐こうとリビングルームからメイド達に気付かれない様に抜け出すと、入り口から追いかける形でイグニスが疲れた顔で飲み物を飲んでいた。もう一本の方のジュースをフォル二カに手渡したイグニスは、尚も飲み物を飲み続けている。ジュースを受け取ったフォル二カは、申し訳なさそうな顔でジュースを飲んでいた。それがイグニスにも伝わったのか、イグニスは心配そうに何度か声を掛けていた。

「ごめんなさい・・・」
ジュースを口から離したフォル二カは、短く謝って固まってしまった。「なんのことよ？」とイグニスが笑って払拭しようとしていたが、そのお節介がいけなかった。そこからはフォル二カがジークを

襲った時の事を話し始めた。最初の頃は話を毛頭信じなかったイグニスだが、話が終盤を迎えると現実味が湧いた。そして話し終えたフォル二カは、混沌とした心境のまま涙を流しながらイグニスに凭れかかって涙を必死に我慢していた。

「・・・・でも、私には今のフォル二カがそんな事をするようには見えないわよ？」

いきなり自分の主人を襲った相手ですと言われても、イグニスには経験があったので（ヴィーナス＆ａｍｐ；タナトス）比較的には慣れていた。要は、フォル二カもジークの何処かの魅力に惹かれた少女の一人なのだ。泣き崩れそうになっていたフォル二カだが、リビングルームの扉の僅かな扉から出て来た自分の人形を見て涙も止まってしまった。

「・・えっ？！服ぅ！一体だれが・・」

自分の人形を勝手にコーディネートされたフォル二カは、驚きを隠せないままにリビングルームの扉を開けた。そこでは、自分で用意していた他の人形約３体がクルスやチェリスなどの数名が服を着せて遊んでいた。人形で遊んでいない者は、その遊ぶ光景を見て癒されていた。しかし、それでも和むだけでは済まされないのか遊びに突撃していく者も二・三人いた。

「・・・・あぁ・・私の人形達が・・」

絶望に暮れていたフォル二カだったが、被害者側の人形たちは何処か動きが嬉しそうだ。くるりと回ったり、軽く飛んだりしていた。すると、開いていた扉の間から少女らしき影が飛び出して人形の内の一体を口に銜えた。それを追い掛ける形で、ヴィーナスがリビングルームへやって来た。

「・・ちょっとぉ！待ちなさいよぉ！」

少女の様な猫の様な生き物を追い掛けて来たヴィーナスは、その先で起こっている事に関して顔を綻ばせていた。それは何故か。先程の少女型の猫、種族は「トランス」と言うのだがその子が、銜えた人形の首に爪を立てて人質に取っていたのだ。その光景を見たメイド達は、本当ならば慌てている所が今回は顔がおもいきり綻んでいた。

「仕方ない・・・猫が可哀そうだけど・・それっ！」
リビングの出入り口の近くで微笑ましい光景を見ていたフォル二カだが、流石に自分の人形が爪とぎの道具にされるのも癇に障るので、人形を助けるためにフォル二カは人形たちをトランスへと向かわせた。それを迎撃しようとする形で必死に腕を振っているトランスは、誰の目にも可愛く見えた。だが、それも長くは続かなかった。リーチの差で僅かながらに勝っていた人形たちは、巧みな連係プレーでトランスを追い詰めて行った。追い詰めると言っても、ただ単に隙を見て敏感な所を擽っているだけだ。流石に大衆の面前でガチの殴り合いなど見せられない。

「フニャニャニャ・・・・ふにぃ・・」
暫く対峙していたトランスと人形たちだったが、トランスが息切れを起こした隙に全ての人形で突撃。擽られて息も出来ない程に弱体化して、恍惚の表情を浮かべながらへろへろとダウンしたトランスは、ヴィーナスがしょっぴいて行った。どうやらこのトランスは、飼い主が寝てしまって不満だったらしく悪戯を起こしたらしいとヴィーナスは言っていた。フォル二カは、その知らせを聞いてから人形たちの状態を確認した。どうやら完全にかわし切れていないようで、服の所々が破れたり中身が少量だけはみ出たりしていた。

「あらら・・みんな、いらっしゃい。」
フォル二カが人形に号令をかけて、それに従った人形達がフォル二

カの手やら肩やらに乗っかると、フォル二カが手始めに手に乗っていた人形から修理を始めた。修理は比較的簡単で、この子の場合は肩の部分に亀裂が走っていただけだったので糸で縫い直すだけで終了した。次の修理に入ろうとしたフォル二カだが、それを遮るようにクルスが立っていた。その視線は人形たちをジッと見つめている。その手には携帯用の裁縫箱が。

「・・やってみる？」

手近な肩の人形を取ってクルスに手渡したフォル二カは、直ぐに別の人形の修復に当たった。嬉しそうに返事だけしたクルスは、慎重に人形を治して行った。二人がかりだと早いらしく、ものの数分で全部の人形達が修復された。その頃にはクルスの顔も満足そうになっていた。

「ただいまぁ！みんなぁ今日の晩御飯は・・・あぁ！襲撃魔ぁ！」

タイミングという言葉は彼女に大事にしてもらいたい。買い出しに行っていたミリアが、オルトロスの上に荷物をたくさん載せて帰って来た。そして帰還早々に自分の主人を襲った犯人を見つけた。それはメイド達を愕然とさせそうな話題の筈だが、メイド達は何故かミリアの方を睨んでいた。襲撃魔というキーワードだけならばミリアも当てはまる。今ではヴァイスのおかげで傷一つ残っていないが、以前にメイド達はミリアに（正確にはオルトロスに）殺されかけている。それに比べてフォル二カは、他人を襲うようなことはしなかった上に暴走して今はヴィーナスが回収したトランスの相手もしてくれた。可愛い人形を持っている。フォル二カもそれなりに可愛い。ミリアとは違った感じに友好的。これだけの差があれば、メイド達がどちらを信じるかは明白だった。

「ちょっ・・・そんな目で見ないでよぉ・・・」

メイド達から軽蔑の眼差しで見られたミリアは押しつぶされるよう

な哀しみで少し暗い表情になると、なにも言う事もなく台所の方に歩いて行った。元々は明るい性格のミリアの事だ、心を病んで自分を包丁で傷つけたりは無いだろう。それは、一緒の時間を過ごしてきているメイド達にも分かり切っていた。元々は仲が良いのだ。メイドたちは互いに。ただ、ミリアがフォル二カを危険視したのだけが欠点だった。

「ええっと・・・こうやって皆と楽しく過ごしてるけど・・私、帰る所が・・」

人形の修繕も終わり、ミリアとの一悶着も意外と早く終わって少しして、フォル二カが唐突に窓の外を見た。外は、まるで時間が過ぎていくのを忘れ去らせるかのようにあっという間に夕方になっていた。すると、リビングで人形に見入っていたイヴがこれまた唐突に「一緒に暮らす？」とだけ言って、人形から目を放してメイド服の形を整えると改めてフォル二カに手を伸ばした。それを元気の良い返事で握ったフォル二カは、晴れて（ジークの許可は無し。ただ、少しして目を覚ましたジークがＯＫした）ジークフリート邸のメイドの一人となった。

第１９説　トラウマ　番外編　乙女の園ｐａｒｔ１（後書き）

新たにフォル二カをメイドに迎え入れたジーク
そんな楽しい一日の風景
それが続いて欲しいと願うのは人の性

次回　第２０節　総出のお買い物

第２０節　総出のお買いもの（前書き）

この回はおまけの様な回の為、少し短めの作成となっております。
ご了承のうえで読んでください。

第２０節　総出のお買いもの

フォル二カを新たにメイドとして迎え入れた翌日、ジークはある事に付いて頭を悩ませていた。その内容とは至極簡単な物なのだ。先日にメイド達からこんなお願いが出された。

『お兄ちゃん！明日は皆と一緒にお買い物に行こう？ねぇ。』

フォル二カが来て少ししてからの夕食時に、メイド達からまるで計画されて練習も重ねていたかのようにピッタリのタイミングでみんなして買い物を強請って来た。最初はどちらでも良かったジークだが、メイド達のジークを見る目に押されたジークは暫くしてからやっとＯＫを出した。そして翌日の今に至っている。買い物できるお金は将軍家故に腐るほど充実している。メイド達も自分で買った物は自分で持つと言っている。しかし、問題点が幾つか出てきてしまった。まず、ジークは何を買おうか未だに迷っていると言う事。そして二つ目は、総出と言う事で館が開いてしまう事だった。

「・・話は聞かせて貰いました。兄上。」「留守は僕達が守ります」ジークがモゴモゴと口を動かしながら困っていたが、その問題は直ぐに解決された。ジークの部屋に入って来たアダムとロミオが、自分から留守の警護を買って出てくれた。すると、アダムと一緒に来ていたイヴ、ロミオの手を握って隣に立っているジュリエットも自分から「アダムが残るなら！」「ロミオが残るなら！」と留守を買って出た。立候補する分には断る理由も特に無かったので、ジークは四人に留守を任せて自分の部屋を出た。

「よし・・後はみんなを・・・もう集まってるや。」

ジークは、一階に下りてメイド達を集めようとした。しかしジークが階段を降りるとそこにはヴィーナスを先頭としたメイド達が一列

に整列していた。もちろんメイド達はメイド服姿だ。しかし、普段はシャツなどを来てお洒落をしている筈のヴィーナスまでもがメイド服を着ていた。

「さぁ！みんな行くわよ！」
ヴィーナスが、メイド達に号令をかけた。どうやら一番楽しみにしていたのはヴィーナスだったらしい。表情も明るい。因みにタナトスはヴィーナスが部屋を散らかしたらしく、その片付けに追われていて付いて来れそうになかった。なので変わりにあのトランスが一緒に居る。

「さぁみんなぁ？買い物・・・始めるぞぉ！」
ヴィーナスが号令を掛け、それに答えるようにメイド達が返事を返してそれぞれに商店街の店店に入って行った。暫くは商店街中央の噴水広場で腰掛けて待っていたジークだが、暫くするとクルスがジークを引っ張って人形店に連れ込んで、フォル二カと一緒にぬいぐるみ選びを任された。可愛らしい兎のぬいぐるみを見つけたジークは、それを教えてあげるとクルスは相当気に行ったのか、買った後もずっと抱きしめていた。その表情はニコニコしている。そしてまた噴水広場で休もうとしたジークだが、直ぐに今度はヴィーナスがジークを洋服店に引き込んだ。そして何着も試着した服の評価を聞かれて、これが良いと思えた服を見つけると、それをヴィーナスも気に行っていたのかとても喜んでいた。そして噴水広場に戻ったジークはまたもや誰かに此処へ、あの子に此処へといった具合にドンドン連れ回された。そして、全員で帰る頃には既にかなりの量の荷物になっていた。そしてジーク達は自分の館の扉を開けて帰って来た。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9666l/

LAGNNALOK~神々の最終戦役録~

2010年12月14日15時02分発行